

五重塔

幸田露伴



其一

木理美もくめうるは

しき槻胴けやきどう

縁にはわざと赤檜を用ひたる岩畳がんでふ作りの長

火鉢に對ひて話し敵がたきもなく唯一人、

少しは淋しさうに坐り居る

三十前後の女、男のやうに立派な眉を何日掃いひしか剃つたる痕

の青々と、見る眼も覚むべき雨後の山の色をとめて翠みどりの匀ひとひ

一トしほ床しく、鼻筋つんと通り眼尻キリ、と上り、洗ひ髪をぐ

るくと酷むごく丸まるめて引裂紙をあしらひに一本簪いっぽんざしでぐいと留めを

刺した色氣無の様はつくれど、憎いほど烏黒まつくろにて艶ある髪かみの毛

の一ふさ綜こ二綜後れ乱れて、浅黒いながら渋氣の抜けたる顔にかゝ

れる趣きは、年増嫌ひでも褒めずには置かれまじき風体ふうてい、我が

ものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢しれものが随分頼まれ

もせぬ詮議を蔭では為べきに、さりとみえは外見を捨て、堅義を自

慢にした身の装つくり方、柄の選択えらみこそ野暮ならね高が二子の綿入
れに繻子襟かけたを着て何所に紅くさいところもなく、引つ掛
けたね、ね、こばかりは往時むかし何なりしやら疎あらい縞の糸織なれど、
此とて幾度か水を潜つて来た奴なるべし。

今しも台所にては下婢おさんが器物洗ふ音ばかりして家内静かに、
他には人ある様子もなく、何心なくいたづらに黒文字を舌端したざきで
舐なぶり躍おどらせなどして居し女、ふつりと其を噛み切つてふいと吹
き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火体よく埋いけ、芋籠より小巾こぎれ
とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋ま
で奇麗にして、さて南部霰地なんぶあられの大鉄瓶を正然ちやんとかけし後、石尊様
詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産おみやと呉れた
らしき寄木細工の小織麗こぎようなる煙草箱を、右の手に持た鼈甲管べつつかふうおの
煙管きせるで引き寄せ、長閑に一服吸ふて線香の烟るやうに緩ゆるくくと烟

りを噴^はき出し、思はず知らず太息^{ためいき}吐いて、多分は良人^{うち}の手に入るであらうが憎いのつ、そり、めが対^{むか}ふへ廻り、去年使ふてやつた恩も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、強^{たう}て此度^{こんど}の仕事を為^せうと身の分も知らずに願ひを上げたとやら、清吉の話しでは上人様に依怙^{えこひ}鬚^{いぎ}の御情^{おこころ}はあつても、名さへ響かぬのつそりに大切^{だいじ}の仕事を任せらるゝ事は檀家^{ちんか}方の手前寄進者^{いひつ}方の手前も難しからうなれば、大丈夫此方^{こち}に命^{いのち}けらるゝに極つたこと、よしまたのつそりに命けらるればとて彼奴^{あれぬ}に出来る仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事^{でか}出来し損ずるは眼に見えたこととのよしなれど、早く良人が愈々御用命^{いのち}かつたと笑ひ顔して帰つて来られゝばよい、類の少い仕事だけに是非^{いひつ}為て見たい受け合つて見たい、慾徳は何でも関はぬ、谷中^{やなか}感応寺^{かんおうじ}の五重塔は川越の源太が作り居つた、嗚呼よく出来した感心なと云は

れて見たいと面白がつて、何日いっになく職業しやうばいに氣のはづみを打つて居らるゝに、若し此仕事を他に奪られたら何のやうに腹を立てらるゝか肝癢を起さるゝか知れず、それも道理であつて見れば傍わきから妾の慰めやうも無い訳、嗚呼何にせよ目出度う早く歸つて来られゝばよいと、口には出さねど女房氣質、今朝背面うしろから我が縫ひし羽織打ち掛け着せて出したる男の上を氣遣ふところへ、表の骨太格子手あらく開けて、姉御、兄貴は、なに感応寺へ、仕方が無い、それでは姉御に、済みませんが御頼み申します、つい昨晚ゆうべ酔へまして、と後は云はず異な手つきをして話せば、眉頭に皺をよせて笑ひながら、仕方のないも無いもの、少し締まるがよい、と云ひくゝ立つて幾干いくらかの金を渡せば、其をもつて門口に出で何やら諄々くどくど押問答せし末此方こなたに來りて、拳骨で額を抑へ、何も済みませんでした、ありがたうござりまする、

と無骨な礼を為たるも可笑^{をか}し。

其二

火は別にとらぬから此方^{こち}へ寄るがよい、と云ひながら重げに鉄瓶を取り下して、属輩^{めした}にも如才なく愛嬌を汲んで与^やる桜湯一杯、心に花のある待遇^{あしらひ}は口に言葉の仇繁きより懐かしきに、悪い請求^{たのみ}をさへすらりと聴て呉れし上、胸に蟠屈^{わだかま}りなく淡然^{さつぱり}と平日のごとく仕倣^{しな}されては、清吉却つて心羞^{うらはづ}かしく、何やら魂魄^{どう}の底の方がむづ痒いやうに覚えられ、茶碗取る手もおづ／＼として進みかぬるばかり、済みませぬといふ辞誼^{じぎ}を二度ほど繰返せし後、漸く乾き切つたる舌を湿す間もあらせず、今頃の帰りとはいふ可^ま愛がられ過ぎたの、ホ、遊ぶはよけれど職業^{しごと}の間を

欠いて母親おふくろに心配さするやうでは、男振が悪いではないか清吉、
汝そなたは此頃仲町の甲州屋様の御本宅の仕事が済むと直に根岸の御

別荘の御茶席の方へ廻らせられて居るではないか、良人うちのも遊

ぶは随分好で汝達の先に立つて騒ぐは毎くなれど、職業しごとを粗略おろそか

にするは大の嫌ひ、今若し汝の顔でも見たらば又例の青筋を立

つるに定つて居るを知らぬでもあるまいに、さあ少し遅くはな

つたれど母親おふくろの持病が起つたとか何とか方便は幾干でもつくべ

し、早う根岸へ行くがよい、五三様ごさも了つた人わかなれば一日をふ

て、怠惰なまけぬに免じて、見透かしても旦那の前は庇護かばふて呉るゝ

であらう、おゝ朝飯がまだらしい、三や何でもよいほどに御膳

を其方へこしらへよ、湯豆腐はまなべに蛤鍋はまなべとは行かぬが新漬に煮豆で

も構はぬはのう、二三杯かつこんで直と仕事に走りやれ走りや

れ、ホ、睡くても昨夜をおもへば堪忍がまんの成らうに精を惜むな辛

防せよ、よいは弁当も松に持たせて遣るは、と苦くはなけれど
効驗きぐめある葉の行きとゞいた意見に、汗を出して身の不始末を慚は
づる正直者の清吉。

姉御、では御厄介になつて直に仕事に突走ります、と驚掴み
にした手拭で額拭きく、勝手の方に立つたかとおもへば、既もうぎ
らく／＼ざらつと口の中へ打込む如く茶漬飯五六杯、早くも食ふ
て了つて出て来り、左様なら行つてまゐります、と肩ぐるみに
頭をついと一ツ下げて煙草きせ管を収め、壺屋の煙草りやうさげ入三尺帯に、
さすがは氣早き江戸ッ子氣質、草履つかけ門口出づる、途端
に今まで黙つて居たりし女は急に呼びとめて、此二三日にのつ
そ、奴めに逢ふたか、と石から飛んで火の出し如く声を迸はしらし問
ひかくれば、清吉ふりむいて、逢ひました逢ひました、しかも
昨日御殿坂で例ののつそりがひとしほのつそりと、往生した鶏とり

のやうにぐたりと首を垂れながら歩行あるいて居るを見かけましたが、今度此方の棟梁の対岸むかうに立つてのつそりの癖に及びも無い望みをかけ、大丈夫ではあるものゝ幾干か棟梁にも姉御にも心配をさせる其面が憎くつて面が憎くつて堪りませねば、やいのつそりめと頭から毒を浴びせて呉れましたに、彼奴の事故気がつかず、やいのつそりめ、のつそりめと三度めには傍へ行つて大声で怒鳴つて遣りましたれば漸く吃驚ふくろして梟ひとに似た眼で我の顔を見詰め、あゝ清吉あーにーいかと寢惚声の挨拶、やい、汝きこまは大分好い男児をとこになつたの、紺屋こうやの干場へ夢にでも上つたか大層高いものを立てたがつて感応寺の和尚様に胡麻を摺り込むといふ話しだが、其は正氣の沙汰か寢惚うすのろけてかと冷語ひやかしを驀向まっかうから与やつたところ、ハ、姉御、愚鈍うすのろい奴といふものは正直ではありませんか、何と返事をするかとおもへば、我わしも随分骨を折つて

胡麻は摺つて居るが、源太親方を対岸に立てゝ居るので何も胡
麻が摺りづらくて困る、親方がのつそり汝きさま為まて見ろよと譲つて
呉れゝば好いけれどもうとの馬鹿に虫の好い答へ、ハ、憶
ひ出しても、心配相に大真面目くさく云つた其面が可笑くて堪
りませぬ、余り可笑いので憎にく気も無くなり、篋べらぼう棒めと云ひ捨て
に別れましたが、其それ限りか。然へい。左様かへ、さあ遅くなる、関
はずに行くがよい。左様ならと清吉は自己おのが仕事におもむきけ
る、後はひとりで物思ひ、戸外おもてでは無心の兒童達こどもが独樂戦こまあての遊
びに声々喧しく、一人殺しぢや二人殺しぢや、醜態ぎさまを見よ讐かたきを
とつたぞと号わめきちらす。おもへばこれも順々がた競争の世の状さまなり。

世に榮え富める人々は初霜月の更衣うつりかへも何の苦慮くるしみなく、紬に糸織おのに自己おのが好ききの衣着きぬて寒さに向ふ貧者の心配も知らず、やれ炉開きぢや、やれ口切ぢや、それに間に合ふやう是非とも取り急いで茶室成就しあげよ待合ひさしの庇廂繕へよ、夜半のむら時雨も一服やりながらで無うては面白く窓撲つ音を聞き難しとの贅沢ちやくいふて、木枯淒じく鐘の音氷るやうなつて来る辛き冬をば愉快こゝろよいものかなんぞに心得らるれど、其茶室の床板とこいた削りに鉋礪かんなとぐ手の冷えわたり、其庇廂の大和がき結ひに吹きさらされて疝癰しんようも起すことある職人風情は、何どれほどの悪い業を前の世に為し置きて、同じ時候に他とは違ひ悩め困くるしませらるゝものぞや、取り分け職人仲間の中でも世才に疎く心好きうちのひと吾夫、腕は源太親方さへ去年いろく世話たしかして下されし節をりに、立派なものぢやと賞められし程確実たしかなれど、寛濶おうえうの氣質きだて故に仕事も取り脱はぐり勝で、好い

事は毎いつも他ひとに奪られ年中嬉しからぬ生活かたに日を送り月を迎
ふる味氣無さ、膝頭の抜けたを辛くも埋め綴つた股引ばかり我
が夫に穿かせ置くこと、婦女をんなの身としては他人よその見る眼も羞づ
かしけれど、何にも彼も貧が為さする不如意に是非のなく、今ま
縫ふ猪之が綿入れも洗ひ曝した松坂縞、丹誠一つで着させても
着させ栄えなきばかりでなく見とも無いほど針目勝ち、それを
先刻は頑おれはない幼心といひながら、母様其衣それは誰がのぢや、小
いからは我の衣服べいふか、嬉しいのうと悦んで其儘戸外おもてへ駈け出し、
珍らしい暖い天氣に浮かれて小竿持ち、空に飛び交ふ赤蜻蛉あかとんぼを
撲はたいて取らうと何処の町まで行つたやら、嗚呼考へ込めば裁縫しじつと
も厭氣になつて来る、せめて腕の半分も吾夫うちのひとの氣心が働いて呉
れたならば斯も貧乏は為まいに、技倆わざはあつても宝の持ち腐れ
の俗諺たとへの通り、何日其手腕うでの顛れて万人の眼に止まると云ふこ

との目的あてもない、たゞき大工穴あなほ鑿り大工、のつそりといふ忌々しい誣名さへ負せられて同業中なかまうちにも軽しめらるゝ齒痒さ恨めしさ、蔭でやきもきと妾が思ふには似ず平氣なが憎らしい程なりしが、今度はまた何した事か感応寺に五重塔の建つといふ事聞くとや否や、急にむら／＼と其仕事を是非す為る氣になつて、恩のある親方様が望まるゝをも関はず胴慾に、此様な身代の身に引き受けうとは、些ちとえら過ぎると連添ふ妾でさへ思ふものを、他人は何んと噂さするであらう、ましてや親方様は定めし憎いのつそりめと怒つてござらう、お吉様きちは猶ほ更ら義理知らずの奴めと恨んでござらう、今日は大抵何方どちらにか任すと言上人様の御定めなさる筈とて、今朝出て行かれしが未だ帰られず、何か今度の仕事だけは彼程吾夫は望んで居らるゝとも此方は分に応ぜず、親方には義理もありかたが旁た親方の方に上人様の任さるれば

よいと思ふやうな氣持もするし、また親方様の大氣にて別段怒りもなさらずば、吾夫に為せて見事成就させたいやうな氣持もする、ゑゝ氣の揉める、何なる事か、到底良人^{とてもうち}には御任せなさるまいが若もいよく、吾夫の爲る事になつたら、何の様にまあ親方様お吉様の腹立てらるゝか知れぬ、あゝ心配に頭脳^{あたま}の痛む、また此が知れたらば女の要らぬ無益^{むだ}心配、其故何時も身体の弱いと、有情^{やさし}くて無理な叱言^{こせと}を受くるであらう、もう止めましょ止めましょ、あゝ痛、と薄痘痕^{うすいも}のある蒼い顔を蹙^{しか}めながら即効紙の貼つてある左右の顚顚^{こめかみ}を、縫ひ物捨てゝ両手で圧へる女の、齡は二十五六、眼鼻立ちも醜からねど美味^{うま}きもの食はぬに膩氣^{あぶらけ}少く肌理^{きめ}荒れたる態あはれにて、檻褸^{ぼろぎもの}衣服にそゝけ髪ますく悲しき風情なるが、つくぐ独り歎ずる時しも、台所の劃^{しき}りの破れ障子がらりと開けて、母様これを見てくれ、と猪之が云ふ

に吃驚して、汝は何時から其所に居た、と云ひながら見れば、四分板六分板の切端を積んで現然ありくと真似び建てたる五重塔、思はず母親涙になつて、おゝ好い児ぞと声曇らし、いきなり猪之に抱きつきぬ。

其四

當時に有名なうての番匠川越の源太が受負ひて作りなしたる谷中感応寺の、何処に一つ批点を打つべきところ有らう筈なく、五十畳敷格天井の本堂、橋をあざむく長き廻廊、幾部いくつかの客殿、大和尚が居室あま、茶室、学徒所化しよけの居るべきところ、庫裡くら、浴室、玄関まで、或は莊嚴を尽し或は堅固を極め、或は清らかに或は寂さびて各々其宜しきに適ひ、結構少しも申し分なし。そもく微々

たる旧基を振ひて箇程かほどの大寺を成せるは誰ぞ。法諱おんなを聞けば其頃みづごの三歳児も合掌礼拝すべきほど世に知られたる宇陀の朗圓上人とて、早くより身延の山に螢雪の苦学を積まれ、中ごろ六十余州に雲水の修行をかさね、毘婆舍那びばしやなの三行じやくじやうに寂静ゑけんの慧劔とを礪ぎ、四種の悉檀しつたんに済度の法音を響かせられたる七十有余の老和尚、骨は俗界の葷羶くんせんを避くるによつて鶴の如くに痩せ、眼まなこは人世の紛紜に厭きて半睡れるが如く、固より壞空ゑくうの理を諦たいして意欲ほのほの火炎を胸に揚げらるゝこともなく、涅槃ねはんの真まを会あして執着の彩色いろに心を染まざるゝことも無ければ、堂塔を興し伽藍を立てんと望まれしにもあらざれど、徳を慕ひ風を仰いで寄り来る学徒のいと多くて、其等のものが雨露凌がんに便宜たよりも旧もとのまゝにては無くなりしまゝ、猶少し堂の広くもあれかしなんと独語つごやかれしが根となりて、道德高き上人の新に規模を大うして寺を建

てんと云ひ玉ふぞと、此事八方に伝播ひろまれば、中には徒弟りしこうの伶俐なるが自ら奮つて四方に馳せ感応寺建立に寄附を勧めて行くあるもあり、働き顔に上人の高徳を演のべ説き聞かし富豪を慫慂すくめて喜捨せしむる信徒もあり、さなきだに平素ひじろより随喜渴仰の思ひを運べるもの雲霞の如きに此勢をもつてしたれば、上諸侯より下町人まで先を争ひ財を投じて、我一番に福田ふくでんへ種子を投じて後の世を安楽やすくせんと、富者は黄金白銀を貧者は百銅二百銅を分に應じて寄進せしにぞ、百川海ひやくせんに入るごとく瞬く間ひまに金銭の驚かるゝほど集りけるが、それより世才に長たけたるものの世話人となり用人なり、万事万端執り行ふて頓やがて立派に成就しけるとは、聞いてさへ小気味のよき話なり。

然るに悉しつかい皆成就の暁、用人頭の爲右衛門普請諸入用諸雜費一切しめくしめくゝり、手脱てぬかる事なく決算したるに尚大金の剩あまれるあり。

此をば如何になすべきと役僧の圓道もろとも、髪ある頭に髪無き頭突き合はせて相談したれど別に殊勝なる分別も出でず、田地を買はんか畠買はんか、田も畠も余るほど寄附のあれば今更また此淨財を其様な事に費すにも及ばじと思案にあまして、面倒なり好に計らへと皺枯れたる御声にて云ひたまはんは知れてあれど、恐るゝ圓道或時、思さるゝ用途もやと伺ひしに、塔を建てよと唯一言云はれし限り振り向きも為たまはず、鼈甲縁の大きなる眼鏡の中より微なる眼の光りを放たれて、何の経やら論やらを黙々と読み続けられけるが、いよく塔の建つに定つて例の源太に、積り書出せと圓道が命令けしを、知つてか知らずに歟上人様に御目通り願ひたしと、のつそりが来しは今より二月程前なりし。

其五

紺とはいへど汗に褪め風に化^{かは}りて異な色になりし上、幾度か洗^すひ濯^{すす}がれたるため其としも見えず、襟の記印^{しるし}の字さへ臃氣となりし絆纏^{はこり}を着て、補綴^{つぎ}のあたりし古股引を穿きたる男の、髪は塵埃^{ほこり}に塗^{まみ}れて白け、面は日に焼けて品格^{ひん}なき風采^{やうす}の猶更品格なきが、うろくのそくと感応寺の大門を入りにかゝるを、門番尖り声で何者ぞと怪み誰^た何^ずせば、吃驚^{しぱらく}して暫時眼を見張り、漸く腰を屈めて馬鹿丁寧^{たうじん}に、大工の十兵衛と申しまする、御普請につきまして御願に出ました、とおづく、云ふ風態^{そふり}の何となく腑には落ちねど、大工とあるに多方源太が弟子かなんぞの使ひに來りしものならむと推察^{すみ}して、通れと一言押柄^{あふへい}に許しける。十兵衛これに力を得て、四方^{あた}を見廻はしながら森嚴^{かうく}しき玄關

前にさしかゝり、御頼申すと二三度いへば鼠衣せいたいの青黛頭あたま、可愛らしき小坊主ぼやの、応おと答へて障子引き開けしが、応接に慣れたるものの眼捷ばやく人を見て、敷台までも下りず突立ちながら、用事なら庫裡の方へ廻れ、と情無く云ひ捨て、障子ぴつしやり、後は何方どこやらの樹頭きに啼く鶉ひよの声ばかりして音もなく響きもなし。成程と独言しつゝ十兵衛庫裡にまはりて復案内を請へば、用人爲右衛門仔細らしき理屈顔して立出で、見なれぬ棟梁殿、何所いづくより何の用事で見えられた、と衣服みなりの粗末なるに既侮はやり輕しめた言葉遣ひ、十兵衛さらに氣にもとめず、野生わたくしは大工の十兵衛と申すもの、上人様の御眼にかゝり御願ひをいたしたい事のあつてまゐりました、どうぞ御取次ぎ下されまし、と首かうべを低くして頼み入るに、爲右衛門ぢろりと十兵衛が垢臭あたまき頭上より白の鼻緒の鼠色になつた草履穿き居る足先まで睨め下し、ならぬ、

ならぬ、上人様は俗用に御関りはなされぬは、願といふは何か知らねど云ふて見よ、次第によりては我が取り計ふて遣る、と然もく、万事心得た用人めかせる才物ぶり。それを無頓着の男の質朴にも突き放して、いゑ、ありがたうはござりますれど上人様に直ぐで無うては、申しても役に立ちませぬ事、何卒たゞ御取次を願ひまする、と此方の心が醇粹なれば先方の氣に觸る言葉とも斟酌せず推返し言へば、爲右衛門腹には我を頼まぬが憎くて慍りを含み、理の解らぬ男ぢやの、上人様は汝ごとき職人等に耳は仮したまはぬといふに、取次いでも無益なれば我が計ふて得させんと、甘く遇へば附上る言分、最早何も彼も聞いてやらぬ、帰れ帰れ、と小人の常態とて語氣たちまち粗暴くなり、謬なく言ひ捨て立んとするに周章てし十兵衛、ではござりませうなれど、と半分いふ間なく、五月蠅、喧しいと打消され、

奥の方に入られて仕舞ふて茫然と土間に突立つたまゝ掌の裏の
螢に脱去られし如き思ひをなしけるが、是非なく声をあげて復
案内を乞ふに、口ある人の有りや無しや薄寒き大寺の岑閑と、
反響のみは我が耳に墮ち来れど咳声一つ聞えず、玄関にまはり
て復頼むといへば、先刻見たる憎気な伶俐小僧の一寸顔出して、
庫裡へ行けと教へたるに、と独語きて早くも障子ぴしやり。

復庫裡に廻り復玄関に行き、復玄関に行き庫裡に廻り、終に
は遠慮を忘れて本堂にまで響く大声をあげ、頼むく御頼申す
と叫べば、其声より大きな声を発して馬鹿めと罵りながら爲右衛
門づかくと立出で、僮僕ども此狂漢を門外に引き出せ、騒々
しきを嫌ひたまふ上人様に知れなば、我等が此奴のために叱ら
るべしとの下知、心得ましたと先刻より僕人部屋に転がり居し
寺僕等立かゝり引き出さんとする、土間に坐り込んで出されじ

とする十兵衛。それ手を取れ足を持ち上げよと多勢口々に罵り騒ぐところへ、後園の花二枝三枝剪はさんで床の眺めにせんと、境内彼方此方逍遙されし朗圓上人、木蘭色もくらんじきの無垢を着て左の手に女郎花桔梗、右の手に朱塗しゆの把りの鋏持たせられしまゝ、図らず此所に来かゝりたまひぬ。

其六

何事に罵り騒ぐぞ、と上人が下したまふ鶴の一声の御言葉に群ともがら雀とさの輩鳴りを歇めて、振り上げし拳こぶしを蔵かくすに地なく、禪僧の問答に有りや有りやと云ひかけしまゝ一喝されて腰の折くたけたる如き風情なるもあり、捲り縮めたる袖を体裁きまり悪げに下して狐鼠こそととと人の後に隠るゝもあり。天を仰げる鼻の孔より火烟も噴べき

驕慢の怒に意気昂ぶりし爲右衛門も、少しは慚ぢてや首を俛れ
掌を揉みながら、自己おのれが発頭人なるに是非なく、有し次第を我
田に水引き／＼申し出れば、痩せ皺すぢびたる顔に深く長く痕ついた
る法令の皺溝すぢをひとしほ深めて、につたりと徐ゆるかに笑ひたまひ、
婦女をんなのやうに軽く軟かな声小さく、それならば騒がずともよい
こと、爲右衛門そなた汝がたゞ従順すなほに取り次さへすれば仔細は無うて
あらうものを、さあ十兵衛殿とやら老衲わしについて此方へ可来おいで、と
んだ氣の毒な目に遇はせました、と万人に尊敬うやまひ慕はるゝ人は
又格別の心の行き方、未学を輕んぜず下司をも侮らず、親切に
温和ものやさしく先に立て静に導きたまふ後について、迂濶な根性にも
慈悲の浸み透れば感涙とゞめあへぬ十兵衛、段々と赤土のしつ
とりとしたところ、飛石の画趣えづころに布しかれあるところ、梧桐の影
深く四方竹の色ゆかしく茂れるところなど縈めぐり繞めぐり過ぎて、小

やかなる折戸を入れば、花も此といふはなき小庭の唯ものさび
て、有樂形うらくがたの燈籠に松の落葉の散りかゝり、方星宿ほうせいしゆくの手水鉢に
苔の蒸せるが見る眼の塵をも洗ふばかりなり。

上人庭下駄脱ぎすてゝ上にあがり、さあ汝そなたも此方へ、と云ひさ
して掌に持たれし花を早速さそくに釣花活に投げこまるゝにぞ、十兵
衛なか／＼怯おめず臆せず、手拭で足はたくほどの事も氣のつかぬ
男とて為すことなく、草履脱いでをつそりと三疊台目の茶室に
入りこみ、鼻突合はすまで上人に近づき坐りて黙々と一礼する
態は、礼儀に嫻ならはねど充分に偽飾いつはりなき情こころの真実まことをあらはし、幾
度か直にも云ひ出んとして尚開きかぬる口を漸くに開きて、舌
の動きもたど／＼しく、五重の塔の、御願に出ましたは五重の
塔のためでござります、と藪から棒を突き出したやうに尻もつ
たてゝ声の調子も不揃に、辛くも胸にあることを額やら腋の下

の汗と共に絞り出せば、上人おもはず笑を催され、何か知らねど老衲わしをば怖いものなぞと思はず、遠慮を忘れて緩りゆると話をするがよい、庫裡の土間に坐り込うで動かずに居た様子では、何か深う思ひ詰めて来たことであらう、さあ遠慮を捨てゝ急やかずに、老衲をば朋友同様にともだちおもふて話すがよい、と飽くまで慈やさしき注意こころぞへ。十兵衛脆くも梟と常々悪口受くる銅鈴眼に既涙はやを浮めて、唯はい、唯、唯ありがたうござりまする、思ひ詰めて参上まゐりました、その五重の塔を、斯様いふ野郎でござります、御覧の通り、のつそり十兵衛と口惜あだない譚名をつけられて居る奴でござりまする、然し御上人様、真実ほんとでござりまする、工事しごとは下手ではござりませぬ、知つて居ります私しは馬鹿でござります、馬鹿にされて居ります、意気地の無い奴でござります、虚誕うそはなか／＼申しませぬ、御上人様、大工は出来ます、大隅流おほすみりうは童児こどもの時か

ら、後藤立川二ツの流義も合点致して居りまする、為^させて、五重塔の仕事を私に為^させていたゞきたい、それで参^{まゐ}りました、川越の源太様が積りをしたとは五六日前聞きました、それから私は寐^まませぬは、御上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けて居ります源太様の仕事を奪^とりたくはおもひませぬが、あゝ賢い人は羨^{うらや}ましい、一生一度百年一度の好い仕事を源太様は為^なるゝ、死んでも立派に名を残さるゝ、あゝ羨^{うらや}ましい羨^{うらや}ましい、大工となつて生てゐる生甲斐もあらるゝといふもの、それに引代へ此十兵衛は、鑿^{のみてうな}手斧もつては源太様にだとして誰にだとして、打つ墨縄の曲ることはあれ万が一にも後れを取るやうな事は必ずく無いと思へど、年が年中長屋の羽^は目^め板の繕^{おれ}ひやら馬小屋箱溝の数仕事、天道様が智慧といふものを我^{われ}には賜^{くだ}さらない故仕方が無いと諦めて諦めても、

拙い奴等が宮を作り堂を受負ひ、見るものの眼から見れば建てさせた人が氣の毒なほどのものを築造へたを見るたびごとに、内々自分の不運を泣きますは、御上人様、時々は口惜くて技倆もない癖に智慧ばかり達者な奴が憎くもなりますは、御上人様、源太様は羨ましい、智慧も達者なれば手腕も達者、あゝ羨ましい仕事をなさるか、我はよ、源太様はよ、情無い此我はよと、羨ましいがつひ高じて女房にも口きかず泣きながら寐ました其夜の事、五重塔を汝作れ今直つくと怖しい人に吩咐けられ、狼狽て飛び起きさまに道具箱へ手を突込んだは半分夢で半分現、眼が全く覚めて見ますれば指の先を鑢鑿につっかけて怪我をしながら道具箱につかまつて、何時の間にか夜具の中から出て居た詰らなさ、行燈の前につくねんと坐つて嗚呼情無い、詰らないと思ひました時の其心持、御上人様、解りまするか、

ゑゝ、解りまするか、これだけが誰にでも分つて呉れゝば塔も建てなくてもよいのです、どうせ馬鹿なのつ、そり、十兵衛は死んでもよいのでござりまする、腰拔鋸のこのやうに生て居たくもないのですは、其夜それからといふものは真実ほんと、真実でござりまする上人様、晴れて居る空を見ても燈光あかりの達とどかぬ室へやの隅の暗いところを見ても、白木造りの五重の塔がぬつと突立つて私を見下して居りまするは、とう／＼自分が造りたい氣になつて、到底及ばぬとは知りながら毎日仕事を終ると直に夜を籠めて五十分一の雛形をつくり、昨夜で丁度仕上げました、見に来て下され御上人様、頼まれもせぬ仕事は出来て仕たい仕事は出来ない口惜さゝゑゝ不運ほど情無いものはないと私わしが歎けば御上人様、なまじ出来ずば不運も知るまいと女房かめが其雛形それをば揺り動かしての述懐、無理とは聞えぬだけに余計泣きました、御上人様御慈悲

に今度の五重塔は私に建てさせて下され、拝みます、こゝ此通り、と両手を合せて頭を畳に、涙は塵を浮べたり。

其七

木彫の羅漢のやうに黙々と坐りて、菩提樹の實の珠数繰りながら十兵衛が埒なき述懐に耳を傾け居られし上人、十兵衛が頭を下ぐるを制しとゞめて、了解わかりました、能く合点が行きました、あゝ殊勝な心掛を持つて居らるゝ、立派な考へを蓄へてゐらるゝ、学徒どもの示しにも為たいやうな、老衲わしも思はず涙のこぼれました、五十分一の雛形とやらも是非見にまゐりませう、然し汝に感服したればとて今直に五重の塔の工事しごとを汝に任するはと、軽忽かるはずみなことを老衲の独断ひとりごめで云ふ訳にもならねば、これだ

けは明瞭^{はつきり}とことわつて置きまする、いづれ頼むとも頼まぬとも
其は表立つて、老衲^{らうなつ}からではなく感応寺から沙汰を為ませう、
兎も角も幸ひ今日は閑暇^{ひま}のあれば汝が作つた雛形を見たし、案
内して是より直に汝が家へ老衲を連れて行ては呉れぬか、と毫^{すこし}
も辺幅^{やうだい}を飾らぬ人の、義理明^{すぢみち}かに言葉渋滞^{しぶり}なく云ひたまへば、
十兵衛満面に笑を含みつゝ米舂^{つき}くごとく無暗に頭を下げて、唯^{はい}、
唯、唯と答へ居りしが、願ひを御取上げ下されましたか、あゝ
有難うござりまする、野生^{わたくし}の宅^{うち}へ御来臨^{おいで}下さりますると、あゝ
勿体ない、雛形は直に野生めが持つてまゐりまする、御免下さ
れ、と云ひさま流石ののつそりも喜悅に狂して平素^{つね}には似ず、
大袈裟に一つぽつくりと礼をばするや否や、飛石に蹴躓^{こつち}きなが
ら駈け出して我家に帰り、帰つたと一言女房にも云はず、いき
なりに雛形持ち出して人を頼み、二人して息せき急ぎ感応寺へ

と持ち込み、上人が前にさし置きて帰りけるが、上人これを熟よく視みたまふに、初重より五重までの配合つりあひ、屋根庇廂の勾配、腰の高さ、椽木たるぎの割賦わりふり、九輪くりんうけ請花露盤宝珠ばんはうじゆの体裁まで何所に可厭いやなるところもなく、水際立つたる細工ぶり、此が彼不器用らしき男の手にて出来たるものかと疑はるゝほど巧緻たくみなれば、独り私ひそかに歎じたまひて、箇程の技倆を有ちながら空しく埋もれ、名を発せず世を経るものもある事か、傍眼わきめにさへも気の毒なるを当人の身となりては如何に口惜きことならむ、あはれ如是かゝるものになるべきならば功名てがらを得させて、多年抱ける心願こゝろだのみに負そむかざらしめたし、草木とともに朽て行く人の身は固より因縁いんねん仮和合けわがふ、よしや惜むとも惜みて甲斐なく止めて止まらねど、仮令たとへば木匠こだくみの道は小なるにせよ其に一心の誠を委ね生命を懸けて、慾も大概あらましは忘れ卑劣きたな おもひき念も起さず、唯只鑿をもつては能く穿ほらんことを

思ひ、鉋かんを持つては好く削らんことを思ふ心の尊さは金にも銀たぐにも比よみぢへ難きを、僅に残す便宜やすがも無くて徒らに北邸ほくぼうの土に没め、冥途つとの苞と齎し去らしめんと思へば憫然あはれ至極なり、良馬主しゅうを得ざるの悲み、高士世に容れられざるの恨みも詮ずるところはかは異なることなし、よし／＼、我図らずも十兵衛が胸に懷ける無価の宝珠の微光を認めしこそ縁なれ、此度こたびの工事を彼に命け、せめては少しの報酬むくいをば彼が誠実まことの心に得させんと思はれけるが、不図思ひよりたまへば川越の源太も此工事を殊の外に望める上、彼には本堂庫裏くら客殿作らせし因みもあり、然も設計つもり予算がきまで既はや做し出して我眼に入れしも四五日前なり、手腕うでは彼とて鈍きにあらず、人の信用うけは遙に十兵衛に超たり。一ツの工事に二人の番匠、此にも為せし彼にも為せし、那箇いづれにせんと上人も流石これには迷はれける。

其八

明日辰の刻頃までに自身当寺へ来るべし、予て其方工事仰せつけられたきむね願ひたる五重塔の儀につき、上人直接に御話示あるべきよしなれば、衣服等失礼なきやう心得て出頭せよと、おごそか厳格に口上を演ぶるは弁舌自慢の圓珍とて、唐辛子をむざと嗜み食へる祟り鼻の頭さきにあらはれたる滑稽納所。おどけなつしよ平日ならば南蛮和尚といへる譚名を呼びて戲談口き、合ふべき間なれど、本堂建立中朝夕顔を見しより自然と狎おのづなれし馴染みも今は薄くなりたる上、使僧らしう威儀をつくらひて、人さし指中指の二本でやゝもすれば兜背形とつばいなりの頭顱あたまの頂上てつぺんを搔く癖ある手をも法衣ころもの袖に殊勝くさく隠蔽かくし居るに、源太も敬ひ謹んで承知の旨を頭下つゝ答

へけるが、如才なきお吉は吾夫をかゝる俗僧づくにふにまで好く評いはせんとてか帰り際に、出したまゝにして行く茶菓子と共に幾いく千錢か包み込み、是非にといふて取らせけるは、思へば怪しからぬ布施の仕様なり。圓珍十兵衛が家にも詣いたりて同じ事を演べ帰りけるが、扱さて其翌日となれば源太は鬚剃ひげり月代さかやきして衣服をあらため、今日こそは上人の自ら我に御用仰せつけらるゝなるべけれど勢込んで、庫裏より通り、とある一ト間に待たされて坐を正しくし扣ひかへける。

態さまこそ異れ十兵衛も心は同じ張を有ち、導かるゝまゝ打通り

て、人気の無きに寒さ湧ひとまく一室の中に唯一人兀然つくねんとして、今や

上人の招びたまふか、五重の塔の工事しごと一切汝に任すと命令いひつけたま

ふか、若し又我には命じたまはず源太に任すと定めたまひしを

我にことわるため招ばれしか、然さうにもあらば何とせん、浮むよ

しなき埋れ木の我が身の末に花咲かむ頼みも永く無くなるべし、
唯願はくは上人の我が愚^{おろか}※しきを憐みて我に命令たまはむこと
をと、九尺二枚の唐襖に金鳳銀鳳翔^{きんほうぎんわうかけ}り舞ふ其箔模様^{おもひ}の美しきも
眼に止めずして、茫々^{やみぢ}と暗路に物を探るごとく念想を空に漂は
すこと良久^やしきところへ、例の伶俐気な小僧^{こぼうず}いで来りて、方丈
さまの召しますほどに此方へおいでなされまし、と先に立つて
案内すれば、素破^{すは}や願望^{のぞみ}の叶ふとも叶はざるとも定まる時ぞと
おろか魯鈍の男も胸を騒がせ、導かるゝまゝ随ひて一室の中へずつと
入る、途端に此方をぎろりつと見る眼鋭く怒を含むで斜に睨む
は思ひがけなき源太にて、座に上人の影もなし。事の意外に十
兵衛も足踏みとめて突立つたるまゝ一言もなく白眼^{にらみ}合ひしが、
是非なく畳二ひらばかりを隔てしところに漸く坐り、力なげ首

悄然と己れが膝に氣勢のなきたさうなる眼を注ぎ居るに引き替へ、源太郎は小狗を瞰下す猛鷲の風に臨んで千尺の巖の上に立つ風情、腹に十分の強みを抱きて、背をも屈指ねば肩をも歪めず、すつきり端然と構へたる風姿と云ひ面貌といひ水際立つたる男振り、万人が万人とも好かずには居られまじき天晴小気味のよき好漢なり。

されども世俗の見解には墮ちぬ心の明鏡に照らして彼れ此れ共に愛し、表面の美醜に露泥まれざる上人の却つて何れをとも昨日までは忤びかねられしが、思ひつかるゝことのありてか今日はわざゝ二人を招び出されて一室に待たせ置かれしが、今しも静々居間を出られ、畳踏まるゝ足も軽く、先に立つたる小僧が襖明くる後より、すつと入りて座につきたまへば、二人は恭ひ敬みて共に斉しく頭を下げ、少時上げも得せざりしが、嗚呼

いぢらしや十兵衛が辛くも上げし面には、未だ世馴れざる里の子の貴人の前に出しやうに羞はぢを含みて紅潮さし、額の皺の幾条の溝にじみには沁出し熱汗あせを湛へ、鼻の頭さきにも珠を湧かせば腋の下には雨なるべし。膝おに載きたる骨太の掌指ゆびは枯れたる松枝まつがえごとき岩畳作りにありながら、一本ごとに其さへも戦わなく顫へて一心に唯上人の一言を一期いちごの大事と待つ笑止さ。

源太も黙して言葉なく耳を澄まして命を待つ、那方どちらを那方と判かぬる、二人の情こころを汲みて知る上人もまた中々に口を開かんよすが便宜なく、暫時は静まりかへられしが、源太十兵衛ともに聞け、今度建つべき五重塔は唯一ツにて建てんといふは汝達二人、二人の願ひを双方とも聞き届けては遣りたけれど、其は固より叶ひがたく、一人に任さば一人の歎き、誰に定めて命いのちけんといふ標準きめどころのあるではなし、役僧用人等の分別にも及ばねば老僧わしが分

別にも及ばぬほどに、此分別は汝達の相談に任す、老僧は関はぬ、汝達の相談の纏まりたる通り取り上げて与るべければ、熟く家に歸つて相談して来よ、老僧が云ふべき事は是ぎりぢやによつて左様心得て歸るがよいぞ、さあ確と云ひ渡したぞ、既早歸つてもよい、然し今日は老僧も閑暇で退屈なれば茶話しの相手になつて少時居てくれ、浮世の噂なんど老衲に聞かせて呉れぬか、其代り老僧も古い話しの可笑なを二ツ三ツ昨日見出したを話して聞かさう、と笑顔やさしく、朋友かなんぞのやうに二人をあしらふて、扱何事を云ひ出さるゝやら。

其九

小僧がこぼうず將つて来し茶を上人自ら汲み玉ひてすく侑めらるれば、二

人とも勿体ながりて恐れ入りながら頂戴するを、左様遠慮され
ては言葉に角が取れいで話が丸う行かぬは、さあ菓子も挟んで
はやらぬから勝手に摘んで呉れ、と高坏たかつき推遣りて自らも天目取
り上げ喉を湿うるほしたまひ、面白い話といふも桑門よすてびとの老僧等には左
様沢山無いものながら、此頃読んだ御経の中につくぐ成程と
感心したことのある、聞いて呉れ此様いふ話しぢや、むかし某
国の長者が二人の子を引きつれて麗かな天氣をりの節に、香のする
花の咲き軟かな草の滋しげつて居る広野を愉快たのしげに遊行ゆきやうしたところ、
水は大分に夏の初め故か涸れたれど猶清らかに流れて岸を洗ふて
居る大きな川に出逢いであふた、其川の中には珠のやうな小磧こいしやら銀
のやうな砂で成できて居る美しい洲のあつたれば、長者は興に乗じ
て一尋ばかりの流を無造作に飛び越え、彼方此方を見廻せば、
洲うしろの後面の方もまた一尋ほどの流で陸と隔てられたる別世界、

全然浮世の腥羶なまぐさい土地つちとは懸絶れた清浄の地であつたまゝ、独り
歎なげび喜んで踊躍ゆやくしたが、渉わたらうとしても渉り得ない二人の児童こども
が羨うらやましがつて喚よび叫こゑぶを可憐あはれに思ひ、汝達には来ることの出
来ぬ清浄の地であるが、然程に來たくば渡らして与やるほどに待
つて居よ、見よ／＼我が足下の此磧しきは一ゝ蓮華の形状かたちをなし居
る世に珍めづしき磧なり、我が眼の前の此砂すなは一ゝ五金の光を有て
る比類たぐひ稀なる砂なるぞと説き示せば、二人は遠眼にそれを見て
いよ／＼焦躁あせり渡らうとするを、長者しづかは徐に制しながら、洪水おほみづ
の時にても根こぎになつたるらしき棕櫚そなたの樹の一尋余りなを架
渡して橋として与つたに、我が先へ汝そなたは後にと兄弟争せめひ闘たたかいだ
末、兄は兄だけ力強く弟を終に投げ伏せて我意の勝を得たに誇
り高ぶり、急ぎ其橋を渡りかけ半途なかばに漸く到りし時、弟は起き
上りさま口惜うごさに力を籠めて橋を盪うごかせば兄は忽ち水に落ち、

苦しみ跪いて洲に達せしが、此時弟は既其橋を難なく渡り超え
かくるを見るより兄も其橋の端を一揺り揺り動せば、固より丸
木の橋なる故弟も堪らず水に落ち、僅に長者の立つたところ
へ濡れ滴りて這ひ上つた、爾時長者は歎息して、汝達には何と
見ゆる、今汝等が足踏みかけしより此洲は忽然前と異なり、磧
は黒く醜くなり沙は黄ばめる普通の沙となれり、見よく如何
にと告げ知らするに二人は驚き、眼を睜りて見れば全く父の言
葉に少しも違はぬ沙磧、あゝ如是もの取らんとて可愛き弟を悩
せしか、尊き兄を溺らせしかと兄弟共に慚ぢ悲みて、弟の袂を
兄は絞り兄の衣裾を弟は絞りて互ひに恤はり慰めけるが、彼橋
をまた引き来りて洲の後面なる流れに打ちかけ、既此洲には用
なければ尚も彼方に遊び歩かん、汝達先づこれを渡れと、長者
の言葉に兄弟は顔を見合ひて先刻には似ず、兄上先に御渡りな

され、弟よ先に渡るがよいと譲合ひしが、年順なれば兄先づ渡る其時に、転びやすきを氣遣ひて弟は端を揺がぬやう確と抑ゆる、其次に弟渡れば兄もまた揺がぬやうに抑へやり、長者は苦なく飛び越えて、三人ともに最長閑く徐に歩む其中に、兄が図らず拾ひし石を弟が見れば美しき蓮華の形をなせる石、弟が摘み上げたる砂を兄が覗けば眼も眩く五金の光を放ちて居たるに、兄弟ともぐくよろこ歡喜ふとこほび樂み、互に得たる幸福しあはせを互に深く讚歎たまたまし合ふ、爾時長者は懷中より真実の璧の蓮華を取り出し兄に与へて、弟にも真実の砂金を袖より出して大切にせよと与へたといふ、話して仕舞へば小供欺しのやうぢやが仏説に虚言うそは無ない、小兒欺しでは決してない、噛みしめて見よ味のある話ではないか、如何ぢや汝等にも面白いそなたたちか、老僧には大層面白いが、と軽く云はれて深く浸む、譬喩方便も御胸の中に有たる、真実から。源

太十兵衛二人とも顔見合せて茫然たり。

其十

感応寺よりの帰り道、半分は死んだやうになつて十兵衛、どんつく布子ぬのこの袖組み合はせ、腕拱きつゝ迂濶うかく歩き、御上人様の彼様あゝ仰やつたは那方どちらか一方おとなしく譲れと諭しの謎とは、何程愚鈍おろかな我われにも知れたが、嗚呼譲りたく無いものぢや、折角丹誠に丹誠凝らして、定めし冷て寒からうに御寝みなされと親切で為て呉るゝ女房かゝの世話までを、黙つて居よ余計なと叱り飛ばして夜の眼も合さず、工夫に工夫を積み重ね、今度といふ今度は一世一代、腕一杯の物を建てたら死んでも恨は無いとまで思ひ込んだに、悲しや上人様の今日の御諭し、道理には違

ひない左様も無ければならぬ事ぢやが、此を譲つて何時また五重塔の建つといふ的あてのあるではなし、一生到底とても此十兵衛は世に出ることのならぬ身か、嗚呼情無い恨めしい、天道様が恨めしい、尊い上人様の御慈悲は充分了つて居て露ばかりも難有う無い、思はぬが、吁何あゝどうにも彼かうにもならぬことぢや、相手は恩のある源太親方、それに恨の向けやうもなし、何様しても彼様しても温順すなほに此方こちの身を退くより他に思案も何もない歟、嗚呼無い歟、といふて今更残念な、なまじ此様な事おもひたゝずに、のつそりだけで済して居たらば此様に残念な苦惱おもひもすまいものを、分際忘れた我われが悪かつた、嗚呼我が悪い、我が悪い、けれども、ゑゝ、けれども、ゑゝ、思ふまいゝゝ、十兵衛がのつそりで浮世りこうの伶俐たちな人等の物笑ひになつて仕舞へばそれで済むのぢや、連添はたらきふ女房にまでも内々はたらき活用の利かぬ夫ぢやと唧かこたれながら、夢の

やうに生きて夢のやうに死んで仕舞へば夫で済む事、あきらめて見れば情無い、つくぐ世間が詰らない、あんまり世間が酷過ぎる、と思ふのも矢張愚痴か、愚痴か知らねど情無過ぎるが、言はず語らず諭された上人様の彼御言葉の真実のところを味へば、飽まで御慈悲の深いのが五臓六腑に浸み透つて未練な愚痴の出端でばも無い訳、争ふ二人を何方にも傷つかぬやう捌き玉ひ、末の末まで共に好かれと兄弟の子に事寄せて尚い御経を解きほぐして、噛んで含めて下さつた彼御話に比べて見れば固より我は弟の身、ひとしほ他ひとに譲らねば人間ひとらしくも無いものになる、嗚呼弟とは辛いものぢやと、路も見分かで屈托の眼は涙まなこに曇りつゝ、とぼくとして何一ツ愉快たのしみもなき我家の方に、糸で曳ひかるゝ木偶でくのやうに我を忘れて行く途中、此馬鹿野郎発狂漢め、我の折角洗つたものに何する、馬鹿めと突然だしぬけに噛つく如く罵ら

れ、癩張声に胆を冷してハツと思へば瓦落離顛倒、手桶枕に立てかけありし張物板に、我知らず一足二足踏みかけて踏み覆したる不体裁ざまのなさ。

尻餅ついて驚くところを、狐憑つきめ忌々しい、と駄力ばかりは近江のお兼、顔は子供の福笑戯ふくわらひに眼を付け歪めた多福面おかめの如き房州出らしき下婢おさんの憤怒、拳を挙げて丁と打ち猿臂えんぴを伸ばして突き飛ばせば、十兵衛堪三らず汚塵ほこりに塗まみれ、はいく、狐に誑つままれました御免なされ、と云ひながら悪口雑言聞き捨に痛さを忍びて逃げ走り、漸く我家に帰りつけば、お、御帰りか、遅いので如何いふ事かと案じて居ました、まあ塵埃まぶれになつて如何どうなされました、と払ひにかゝるを、構ふなと言、氣の無ささうな声で打消す。其顔を覗き込む女房の真実心配さうなを見て、何か知らず無性に悲しくなつてぢつと湿うるみのさしくる眼、自分で

自分を叱るやうに、ゑゝと囁らず声を出し、煙草を捻つて何気なくもてなすことはもてなすものゝ言葉も無し。平時つねに変わる状態ありさまを大方それと推察すみして扨慰すべむる便もなく、問ふてよきやら問はぬが可きやら心にかゝる今日の首尾をも、口には出して尋ね得ぬ女房は胸を痛めつゝ、其一本は杉箸で辛くも用を足す火箸に挟んで添へる消炭の、あはれ甲斐なき火力ちからを頼り土瓶の茶をば温ぬくむるところへ、遊びに出たる猪之の戻りて、やあ父様帰つて来たな、父様も建てるか坊も建てたぞ、これ見て呉れ、と然さも勇ましく障子を明けて褒められたさが一杯に罪無く莞爾にこりと笑ひながら、指さし示す塔の模形まねかた。母は襦袢の袖を噛み声も得たてず泣き出せば、十兵衛涙に浮くばかりの円の眼つぶらを剥き出し、睨まじろぎもせでぐいと睨めしが、おゝ出来でかした出来した、好く出来た、褒美与らう、ハッハ、と咽び笑ひの声高く屋の棟にま

で響かせしが、其まゝ頭を天に対はし、嗚呼、弟とは辛いなあ。

其十一

格子開くる響爽かなること常の如く、お吉、今歸つた、と元氣よげに上り来る夫の声を聞くより、心配を輪に吹きく吸て居し煙草管きせるを邪見至極に抛り出して忙はしく立迎へ、大層遅かつたではないか、と云ひつゝ背面うしろへ廻つて羽織を脱せ、立ながら腮あごに手伝はせての袖畳み小早く室隅すみの方に其儘さし置き、火鉢の傍へ直また戻つて火急鉄瓶たちまちに松虫の音を発させおこ、むづと大胡坐かき込み居る男の顔を一寸見しなに、日は暖かでも風が冷く途中は随分寒ひえましたろ、一瓶ひとつ煖酒つけましよか、と痒いところへ能く届かす手は口をきく其間ひまに、がたぴしさせず膳ごしらへ、三

輪漬は柚の香ゆかしく、大根卸で食はする鮭卵は無造作にして
気が利たり。

源太胸には苦慮あれども幾干か此に慰められて、猪口把りさ
まに二三杯、後一杯を漫く飲んで、汝も飲れと与ふれば、お吉
一口、つけて、置き、焼きかけの海苔畳み折つて、追付三子の
来さうなもの、と魚屋の名を独語しつ、猪口を返して酌せし後、
上と吉と腹に思へば動かす舌も滑かに、それはさうと今日の首
尾は、大丈夫此方のものとは極めて居ても、知らせて下さらぬ
中は無益な苦勞を妾は為ます、お上人様は何と仰せか、またの
つそり奴は如何なつたか、左様真面目顔でむつつりとして居ら
れては心配で心配でなりませぬ、と云はれて源太は高笑ひ。案
じて貰ふ事は無い、御慈悲の深い上人様は何の道我を好漢にし
て下さるのよ、ハ、ハ、ハ、なあお吉、弟を可愛がれば好い兄ではな
い。

いか、腹の饑つたものには自分が少しは辛くても飯を分けてやらねばならぬ場合もある、他の怖いことは一厘無いが強いばかりが男児では無いなあ、ハ、、、じつと堪忍して無理に弱くなるのも男児だ、嗚呼立派な男児だ、五重塔は名譽の工事、たゞ我一人で物の見事に千年壊れぬ名物を万人の眼に残したいが、他の手も智慧も寸分交ぜず川越の源太が手腕だけで遺したいが、嗚呼癩癩を堪忍するのが、ゑゑ、男児だ、男児だ、成程好い男児だ、上人様に虚言は無い、折角望みをかけた工事を半分他に呉るのはつくぐ忌々しけれど、嗚呼、辛いが、ゑゑ兄だ、ハ、、、お吉、我はのつそりに半口与つて二人で塔を建てやうとおもふは、立派な弱い男児か、賞めて呉れ賞めて呉れ、汝にでも賞めて貰はなくては余り張合ひの無い話しだ、ハ、、と嬉しさうな顔もせて意味の無い声ばかりはづませて笑へば、お吉は夫の氣

を量りかね、上人様が何と仰やつたか知らぬが妾にはさつぱり分らず些ちつとも面白くない話し、唐偏朴の彼あののつそりめに半口与るとは何いふ訳、日頃の氣性にも似合はない、与るものならば未練氣なしに悉すっかり皆与つて仕舞ふが好いし、固より此方で取る筈なれば要りもせぬ助太刀頼んで、一人の首を二人で切る様な卑劣けちなことをするにも当らないではありませぬか、冷水で洗つたやうな清潔きれいな腹を有つて居ると他にも云はれ自分でも常々云ふて居た汝が、今日に限つて何といふ煮切ない分別、女の妾から見ても意地の足らない愚図々々思案、賞めませぬ賞めませぬ、何して中々賞められませぬ、高が相手は此方こちの恩を受けて居るのつそり奴、一体ならば此方の仕事を先潜りする太い奴と高飛車に叱りつけて、ぐうの音も出させぬやうに為れば成るのつそり奴を、左様甘やかして胸の焼ける連名れんみやうしごと工事を何で為るに当る筈

のあらうぞ、甘いばかりが立派の事か、弱いばかりが好い男児か、妾の虫には受け取れませぬ、何なら妾が一ト走りのつそり奴のところに行つて、重々恐れ入りましたと思ひ切らせて謝罪あやまらせて両手を突かせて来ませうか、と女賢しき夫思ひ。源太は聞いて冷笑あざわらひ、何が汝に解るものか、我の為ることを好いとおもふて居てさへ呉るればそれで可いのよ。

其十二

色も香も無く一言に黙つて居よと遣り込められて、聴かぬ氣のお吉顔ふり上げ何か云ひ出したげなりしが、自己おのれよりは一倍きかぬ氣の夫の制するものを、押返して何程云ふとも機嫌を損ずる事こそはあれ、口答への甲斐は露無きを経験おぼえあつて知り居

れば、連添ふものに心の奥を語り明して相談かけざる夫を恨めしくはおもひながら、其所は怜悧りこうの女の分別早く、何も妾が遮つて女の癖に要らざる嘴くちを出すではなけれど、つい気にかゝる仕事の話し故思はず様子の聞きたくて、余計な事も胸の狭いだけに饒舌つた訳、と自分が真実籠めし言葉を態と極々軽う為て仕舞ふて、何所までも夫の分別に従ふやう表面うはべを粧ふも、幾許か夫の腹の底に在る煩悶もしやくしやそを殺いで遣りたさよりの真実まこと。源太もこれに角張りかゝつた顔をやわらげ、何事も皆まはりあはせ天運ぢや、此方の了見さへ温順すなほに和やさしく有つて居たなら又好い事の廻つて来やうと、此様おもつて見ればのつそりに半口与るも却つて好い心持、世間は氣次第で忌々しくも面白くもなるもの故、出来るだけは卑劣けいちな鏽さびを根性に着けず瀟洒あつさりと世を奇麗に渡りさへすれば其で好いは、と云ひさしてぐいと仰飲あふぎ、後は芝居の噂やら

弟子共が行状みもちの噂、真に罪無き雑話を下物さかなに酒も過ぎぬほど心よく飲んで、下卑げびた体裁さまではあれどとり、膳睦まじく飯を喫を了り、多方もう十兵衛が来さうなものと何事もせず待ちかくるに、時は空しく経過たつて障子の日晷ひかげ一尺動けど尚見えず、二尺も移れど尚見えず。

是非先方むかうより頭を低し身を縮すぼめて此方へ相談に來り、何卒半分なりと仕事を割わけ与けて下されと、今日の上人様の御慈愛おなさけ深き御言葉を頼りに泣きついても頼みをかけべきに、何として如是かうは遅きや、思ひ断めて望を捨て、既早相談にも及ばずとて独り我家に燠くすばり居るか、それともまた此方より行くを待つて居る歟、若しも此方の行くを待つて居るといふことならば余り増長した見なれど、まさかに其様な高慢氣も出すまじ、例ののつそりで悠長に構へて居るだけの事ならむが、扱も氣の長い男め迂濶

にも程のあれと、煙草ばかり徒らに喫かし居て、待つには短き日も随分長かりしに、それさへ暮れて群烏塙ねぐらに帰る頃となれば、流石に心おもしろからず漸く癩癩の起りく／＼て耐へきれずなりし潮先、据られし晩食ゆふめしの膳に対ふと其儘云ひ訳ばかりに箸をつけて茶さへ緩ゆるりとは飲まず、お吉、十兵衛めがところに一寸行て来る、行違ひになつて不在るすへ来ば待たして置け、と云ふ言葉さへとげくしく怒りを含んで立出かゝれば、気にはかゝれど何とせん方もなく、女房は送つて出したる後にて、たゞ溜息をするのみなり。

其十三

浚つて聞きかぬる雨戸に一トしほ源太は癩癩の火の手を亢たからせ

つゝ、力まかせにがち／＼引き退け、十兵衛家にか、と云ひさまに突と這入れば、声色知つたるお浪早くもそれと悟つて、恩ある其人の敵に今は立ち居る十兵衛に連添へる身の面を対すこと辛く、女氣の纖弱くも胸を動悸つかせながら、まあ親方様、と唯一言我知らず云ひ出したる限り挨拶さへどぎまぎして急には二の句の出ざる中、煤けし紙に針の孔、油染みなんど多き行燈の小蔭に悄然と坐り込める十兵衛を見かけて源太にずっと通られ、周章て火鉢の前に請ずる機転の遅鈍も、正直ばかりで世態を知悉ぬ姿なるべし。

十兵衛は不束に一礼して重げに口を開き、明日の朝参上らうとおもふて居りました、といへばぢろりと其顔下眼に睨み、態と泰然たる源太、応、左様いふ其方の心算であつたか、此方は例の氣短故今しがたまで待つて居たが、何時になつて汝の来る

か知れたことでは無いとして出掛けて来ただけ馬鹿であつたか、ハ、ハ、然し十兵衛、汝は今日の上人様の彼お言葉を何と聞たか、ふたり兩人で熟くく相談して来よと云はれた揚句に長者の二人の児の御話し、それで態々相談に来たが汝も大抵分別は既定めて居るであらう、我も随分虫持ちだが悟つて見れば彼あのだとへ警諭の通り、尖りあふのは互に詰らぬこと、まんざら敵同士でもないに身勝手ばかりは我も云はぬ、つまりは和熟した決定のところがけつぢやう欲い故に、我慾は充分折つてくだ摧いて思案を凝らして来たもの、尚汝の了見も腹藏の無いところを聞きたく、其上にまた何様とも為やうと、我も男児なりや汚い謀計たくみを腹には持たぬ、ほんと真実にかう如はおもふて来たは、と言葉を少時とゞめて十兵衛が顔を見るに、俯伏たまゝたゞ唯はい唯と答ふるのみにて、乱鬢の中に五六本の白髪が瞬くあかり燈火の光を受けてちらりくくと見ゆるばかり。お

浪は既寝^{はや}し猪の助が枕の方について坐つて、呼吸さへせぬやう此もまた静まりかへり居る淋しき。却つて遠くに売りあるく鍋焼鰻鮓の呼び声の、幽に外方^{そと}より家^やの中に浸みこみ来るほどなりけり。

源太はいよく、氣を静め、語気なだらかに説き出すは、まあ遠慮もなく外見^{みえ}もつくらず我の方から打明けやうが、何と十兵衛斯しては呉れぬか、折角汝も望をかけ天晴名譽の仕事をして持つたる腕の光をあらはし、慾徳では無い職人の本望を見事に遂げて、末代に十兵衛といふ男が意匠^{おもひつき}ぶり細工ぶり此視て知れと残さうつもりであらうが、察しも付かう我とても其は同じこと、さらに有るべき普請では無し、取り外^{はぐ}つては一生にまた出逢ふことは覚束ないなれば、源太は源太で我が意匠^{おもえ}ぶり細工ぶりを是非遺したいは、理屈を自分のためにつけて云へば我はま

あ感応寺の出入り、汝は何の縁ゆかりもないなり、我は先口、汝は後なり、我は頼まれて設計つもりまで為たに汝は頼まれはせず、他の口から云ふたらばまた我は受負ふても相応、汝が身柄がらでは不相応と誰しも難をするであらう、だとして我が今理屈を味方にするでもない、世間を味方にするでもない、汝が手腕ふだんの有りながら不幸ふしあはせで居るといふも知つて居る、汝が平素薄命ふしあはせを口へこそ出さね、腹の底では何の位泣どて居るといふも知つて居る、我を汝の身にしては堪忍がまんの出来ぬほど悲い一生といふも知つて居る、夫故にこそ去年一昨年何にもならぬことではあるが、まあ出来るだけの世話は為たつもり、然し恩に被せるとおもふて呉れるな、上人様だとして汝の清潔きれいな腹の中を御洞察おみとほしになつたればこそ、汝の薄命ふしあはせを気の毒とおもはれたればこそ今日のやうな御諭し、我も汝が慾かなんぞで対岸むかうにまはる奴ならば、我の仕事ひとに邪魔を入

れる猪口才な死節野郎と一鉦ひとてうなに脳天打欠ぶつかかずには置かぬが、つくづく汝の身を察すれば寧いつそ仕事も呉れたいやうな氣のするほど、といふて我も慾は捨て断れぬ、仕事は眞実何あつても為たいは、そこで十兵衛、聞ても貰ひにくく、云ふても退けにくい相談ぢやが、まあ如是ぢや、堪忍がまんして承知して呉れ、五重塔は二人で建てう、我を主にして汝不足でもあらうが副そへになつて力を仮してはくれまいか、不足ではあらうが、まあ厭でもあらうが源太が頼む、聴ては呉れまいか、頼むく、頼むのぢや、黙つて居るのは聴て呉れぬか、お浪さんも我わしの云ふことの了つたなら何卒口を副て聴て貰つては下さらぬか、と脆くも涙になりゐる女房にまで頼めば、お、お、親方様、ゑゑ、ありがたうござりまする、何所に此様な御親切の相談かけて下さる方のまた有らうか、何故御礼をば云はれぬか、と左の袖は露時雨、涙に重くなしながら

ら、夫の膝を右の手で揺り動しつ掻口説けど、先刻より無言の
仏となりし十兵衛何とも猶言はず、再度三度かきくどけど黙むつくり
として猶言はざりしが、やがて垂れたる首を擡かうべげ、何も十兵衛
それは厭でござりまする、と無愛想に放つ一言、吐胸をついて
驚く女房。なんと、と一声烈しく鋭く、頸首くびぼね反らす一二寸、眼
に角たてゝのつそりを驀まつ向かうよりして瞰下す源太。

其十四

人情の花も失なくさず義理の幹も確然しつかり立てゝ、普通なみのものには出
来ざるべき親切の相談を、一方ならぬ実意じつの有ればこそ源太の
懸けて呉れしに、如何に伐つて抛げ出したやうな性質もちまへが為する
返答なればとて、十兵衛厭でござりまするとは余りなる挨拶、

他の情愛ひと なさけの全で了らぬ土人形でも斯は云ふまじきを、さりとては恨めしいほど没義道な、口惜いほど無分別な、如何すれば其様に無茶なる夫の了見と、お浪は呆れもし驚きもし我身の急に絞木にかけて絞しめらるゝ如き心地のして、思はず知らず夫にすり寄り、それはまあ何といふこと、親方様が彼程に彼方此方のためを計つて、見るかげもない此方連このほうづれ、云はゞ一ト足に蹴落して御仕舞ひなさるゝことも為さらば成できる此方連に、大抵ではない御情をかけて下され、御自分一人で為さりたい仕事をも分与わけて遣らう半口乗せて呉れうと、身に浸みるほどありがたい御親切の御相談、しかも御招喚およびつけにでもなつてでのことか、坐蒲団さへあげることの成らぬ此様なところへ態々御来臨おいでになつての御話し、それを無にして勿体ない、十兵衛厭でござりまするとは冥利の尽きた我儘勝手、親方様の御親切の分らぬ筈は無からうに

胴慾なも無遠慮なも大方程度ほどあひのあつたもの、これ此妾の今着て居るのも去年の冬の取り付きに袷姿の寒げなを氣の毒がられてお吉様の、縫直なほして着よと下されたのとは汝の眼には暎うつらぬか、一方ならぬ御恩を受けて居ながら親方様の対岸むかうへ廻るさへあるに、それを小癩なとも恩知らずなとも仰やらず、何処までも弱い者を愛護かばふて下さる御仁慈深い御分別おなさけにも頼より縋ひらいで一概に厭ぢやとは、仮令ば真底から厭にせよ記憶ものおぼえのある人間ひとの口から出せた言葉でござりまするか、親方様の手前お吉様の所思おもはくをも能く篤とつくりと考へて見て下され、妾はもはや是から先何の顔さげて厚ヶ間敷お吉様の御眼にかゝることの成るものぞ、親方様は御胸の広うて、あゝ十兵衛夫婦は訳の分らぬ愚者なりや是非もないと、其儘何とも思しめされず唯打捨て下さるか知らねど、世間は汝おまへを何と云はう、恩知らずめ義理知らずめ、人情解

せぬ畜生め、彼奴は犬ぢや烏ぢやと万人の指甲に弾かれものとなるは必定、犬や烏と身をなして仕事を為たとて何の功名、慾をかわくな齷齪するなと常々妾に諭された自分の言葉に対しても恥かしうはおもはれぬか、何卒柔順に親方様の御異見について下さりませ、天に聳ゆる生雲塔は誰々二人で作つたと、親方様と諸共に肩を並べて世に称はるれば、汝の苦勞の甲斐も立ち親方様の有難い御芳志も知るゝ道理、妾も何の様に嬉しかるか喜ばしかるか、若し左様なれば不足といふは葉にしたくも無い筈なるに、汝は天魔に魅られて其をまだく不足ぢやとおもはるゝのか、嗚呼情無い、妾が云はずと知れてゐる汝自身の身の程を、身の分際を忘れてか、と泣声になり搔口説く女房の頭は低く垂れて、鬚にさゝれし縫針の孔が啣へし一条の糸ゆらくと振ふにも、千々に碎くる心の態の知られていとゞ可憫しきに、

眼を瞑ぎ居し十兵衛は、其時例の濁声だみじろ出し、喧しいはお浪、黙つて居よ、我の話しの邪魔になる、親方様聞て下され。

其十五

思ひの中に激すればや、じたくと慄ふるひ出す膝の頭を緊しつ乎と寄せ合せて、其上に両手突張り、身を固くして十兵衛は、情無い親方様、二人で為うとは情無い、十兵衛に半分仕事を譲つて下されうとは御慈悲のやうで情無い、厭でござります、厭でござります、塔の建てたいは山々でも既もう十兵衛は断念あきらめて居ります、御上人様の御諭おさとしを聞いてからの帰り道すつぱり思ひあきらめました、身の程にも無い考を持つたが間違ひ、嗚呼私が馬鹿でござりました、のつそりは何処迄ものつそりで馬鹿にさへなつて居

れば其で可い訳、溝板でもたゝいて一生を終りませう、親方様
堪忍かにして下され我が悪い、塔を建てうとは既申もうしませぬ、見ず
知らずの他の人ではなし御恩になつた親方様の、一人で立派に
建てらるゝを余所よそながら視て喜びませう、と元氣無げに云ひ出
づるを走り氣の源太悠ゆるとは聴て居ず、ずいと身を進て、馬鹿
を云へ十兵衛、余り道理が分らな過ぎる、上人様の御諭は汝きこ一
人に聴けといふて為なれたではない我が耳にも入れられたは、汝
の腹でも聞たらば私の胸で受取つた、汝一人に重石おもを背負つて
左様沈まれて仕舞ふては源太が男になれるかやい、詰くすらぬ思案
に身を退て馬鹿にさへなつて居れば可いとは、分別が摯実くす過ぎ
て至当もつともとは云はれまいぞ、応左様ならば我が為ると得たり賢かしこで
引受けては、上人様にも恥かしく第一源太が折角磨いた俠氣をも
其所で廃つて仕舞ふし、汝は固もり虻蜂取らず、智慧の無いにも

程のあるもの、そしては二人が何可からう、さあ其故に美しく二人で仕事を為うといふに、少しは氣まづいところが有つてもそれはお互ひ、汝が不足な程に此方にも面白くないのあるは知れきつた事なれば、双方忍耐^{がまんしあふ}仕交として忍耐の出来ぬ訳はない筈、何もわざ／＼骨を折つて汝が馬鹿になつて仕舞ひ、幾日の心配を煙と消し^{きや}天晴な手腕^{うで}を寝せ殺しにするにも当らない、なう十兵衛、我の云ふのが腑に落ちたら思案を翻^{がら}然と仕変へて呉れ、源太は無理は云はぬつもりだ、これさ何故黙つて居る、不足か不承知か、承知しては呉れないか、ゑゝ我の了見をまだ呑み込んでゐるのか、十兵衛、あんまり情無いではないか、何とか云ふて呉れ、不承知か不承知か、ゑゝ情無い、黙つて居られては解らない、我の云ふのが不道理か、それとも不足で腹立てゝか、と義には強くて情には弱く意地も立つれば親切も飽く

まで徹す江戸ッ子腹の、源太は柔和^{やさし}く問ひかくれば、聞居るお浪は嬉しさの骨身に浸みて、親方様あゝ有り難うござりますると口には出さねど、舌よりも真実を語る涙をば溢らす眼に、返辞せぬ夫の方を氣遣ひて、見れば男は露一厘身動きなさず無言にて思案の頭重く低^たれ、ぽろり／＼と膝の上に散らす涙珠^{なみだ}の零ちて声あり。

源太も今は無言となり少時^{しばらく}ひとり考へしが、十兵衛汝はまだ解らぬか、それとも不足とおもふのか、成程折角望んだことを二人でするは口惜^{しん}かる、然も源太を心にして副になるのは口惜^{しん}かる、ゑゝ負けてやれ斯様して遣らう、源太は副になつても可い汝を心に立てるほどに、さあ／＼清く承知して二人で為うと合点せい、と己が望みは無理に折り、思ひきつてぞ云ひ放つ。とツとんでも無い親方様、仮令十兵衛氣が狂へばとて何して其

様は出来ますものぞ、勿体ない、と周章て云ふに、左様なら我の異見につくか、と唯一言に返されて、其は、と窮るをまた追つ掛け、汝を心きこまに立てやうか乃至それでも不足か、と烈しく突かれて度を失ふ傍にて女房が気もわくせき、親方様の御異見に何故まあ早く付かれぬ、と責むるが如く恨みわび、言葉そゞろに勧むれば十兵衛つひに絶体絶命、下げたる頭を徐しづかに上げ円つぐらの眼を剥き出して、一ツの仕事を二人するは、よしや十兵衛心になつても副になつても、厭なりや何しても出来ませぬ、親方一人で御建なされ、私は馬鹿で終わりまする、と皆まで云はせず源太は怒つて、これほど事を分けて云ふ私の親切なさけを無にしても歟。唯はい、ありがたうはござりまするが、虚言うそは申せず、厭なりや出来ませぬ。汝おのれよく云つた、源太の言葉にどうでもつかぬ歟。是非ないこととでござります。やあ覚えて居よ此のつそりめ、他ひと

の情の分らぬ奴、其様の事云へた義理か、よし／＼汝おのれに口は利かぬ、一生溝どぶでもいぢつて暮せ、五重塔は氣の毒ながら汝に指もさゝせまい、源太一人で立派に建てる、成らば手柄てんに批点てんでも打て。

其十六

ゑい、ありがたうござります、滅法界に酔ひました、もう飲いけやせぬ、と空辞誼そらしぎは五月蠅むぎほど仕ながら、猪口もつ手を後へは退かぬが可笑き上戸の常態つね、清吉既馳走酒に十分酔たれど遠慮に三分ぶの真面目をとゞめて殊勝らしく坐り込み、親方の不在るすに斯様爛醉へては済みませぬ、姉御と対酌さしでは夕暮を躍るやうになつてもなりませんからな、アハ、無暗に嬉しくなつて来ました、

もう行きませう、はめを外すと親方の御眼玉だ、だが然し姉御、
内の親方には眼玉を貰つても私は嬉しいとおもつて居ます、な
にも姉御の前だからとて輕薄を云ふではありませぬが、ほん実に
内の親方は茶袋よりもありがたいとおもつて居ます、いつぞや日外の凌
雲院の仕事の時も鐵や慶を対むかうにして詰らぬことから喧嘩を初め、
鐵が肩先へ大怪我をさした其後で鐵が親から泣き込まれ、嗚呼
悪かつた氣の毒なことをしたと後悔しても此方も貧_{どう}的、何様し
てやるにも遣り様なく、困りきつて逃亡かけおちとまで思つたところを、
黙つて親方から療治手当も為てやつて下された上、わつちかけら半分
叱言らしいことを私に云はれず、たゞ物和しく、清や汝てめへ喧嘩は時
のはづみで仕方は無いが氣の毒とおもつたら謝罪あやまつて置け、鐵
が親の氣持も好かろし汝てめへの寢覺も好といふものだとし心付けて下
すつた其時は、嗚呼何様して此様こんなに仁慈深なさけかると有難くて有難

くて私は泣きました、鐵に謝罪する訳は無いが親方の一言に堪忍がまんして私も謝罪に行きました、それから異なるものおつで何時となく鐵とは仲好になり、今では何方にでも万ひよつと一したことの有れば骨を拾つて遣らうか貰はうかといふ位の交際つきあひになつたも皆親方の御蔭、それに引變へ茶袋なんぞは無暗に叱言を云ふばかりで、やれ喧嘩をするな遊興あそびをするなと下らぬ事を小五月蠅く耳はたの傍で口説きます、ハ、いやはや話になつたものではありませぬ、ゑ、茶袋とは母親おふくろの事です、なに酷くはありませぬ茶袋で沢山です、然も渋をひいた番茶の方です、あッハ、、、、ありがたうござります、もう行きませう、ゑ、また一本爛つけたから飲んで行けと仰るのですか、あゝありがたい、茶袋だと此方で一本といふところを反対あべこべにもう廃せと云ひますは、あゝ好い心持になりました、歌ひたくなりましたな、歌へるかとは情ない、松づく

しなぞは彼奴に賞められたほどで、と罪の無いことを云へばお吉も笑ひを含むで、そろ／＼惚気は恐ろしい、などと調戲からかひ居るところへ歸つて来たりし源太、おゝ丁度よい清吉居たか、お吉飲まうぞ、支度させい、清吉今夜は酔ひ潰れる、胴魔声の松づくしでも聞てやろ。や、親方立聞して居られたな。

其十七

清吉酔ふては檢束しまりなくなり、碎けた源太が談話はなしぶり捌さばけたお吉が接待とりなしぶりに何時しか遠慮も打忘れ、擬さされて辞いなまず受けては突と干し酒盞さかづきの数重ぬるまゝに、平常つねから可愛らしき紅ら顔を一層沢みづくと、実の熟いつた丹波王母珠たんばほゝづきほど紅うして、罪も無き高笑ひやら相手もなしの空示威からりきみ、朋輩の誰の噂彼の噂、自己おのれが

仮声こわいろの何所なんじよ其所で喝采やんやを獲たる自慢、奪あられぬ奪あられるの云ひ争あひの末何楼なになの獅顔しかみ火鉢を盗り出さんとして朋友ともだちの仙の野郎がおほしくじり大失策を仕た話、五十間で地廻りを擲つた事など、縁に引かれ図に乗つて其から其へと饒舌り散らす中、不図のつそりの噂に火が飛べば、とろりとなりし眼を急に見張つて、ぐにやりとして居し肩を聳そだて、冷たうなつた飲みかけの酒を異をかしく唇まげながら吸ひ干し、一体あんな馬鹿野郎を親方の可愛はこがるといふが私わつちには頭てんから解りませぬ、仕事といへば馬鹿丁寧で捗はこびは一向つきはせず、柱一本鳴居しきゐ一ツで嘘をいへば鉋を三度も礪とぐやうな緩慢のろまな奴、何を一ツ頼んでも間に合つた例ためしが無く、赤松の炉縁一ツに三日の手間を取るといふのは、多方あゝいふ手合だらうと仙が笑つたも無理は有りませぬ、それを親方が鼯きん鼠にしただけで一時は正直のところ、済みませんが私も金きんも仙も六も、

あんまり親方の腹が大きすぎて其程でもないものを買い込み過ぎて居るでは無いか、念入りばかりで氣に入るなら我等も是から羽目板にも仕上げ鉋、のろり／＼と充分清めて碁盤肌^{したゝか}にでも削らうかと僻味^{ひがみ}を云つた事もありました、第一彼奴は交際^{つきあひ}知らずで女郎^{ぢよろかひ}買一度一所にせず、好闘^{しやも}鶏鍋^もつゝき合つた事も無い唐偏朴、何時か大師へ一同^{みんな}が行く時も、まあ親方の身边^{まはり}について居るものを一人ばかり仲間はずれにするでも無いと私が親切に誘つてやつたに、我^{われ}は貧乏で行かれないと云つた切りの挨拶は、なんと愛想も義理も知らな過ぎるではありませんか、錢が無ければ女房^{かゝ}の一枚着を曲げ込んでも交際^{つきあひ}は交際^{ともだち}で立てるが朋友^{ともだち}づく、それも解らない白痴^{たはけ}の癖に段々親方の恩を被て、私や金と同じことに今では如何か一人立ち、然も憚りながら青涕垂らし^{あをつばな}て弁当箱の持運び、木片^{こつぱ}を担いでひよろ／＼帰る餓鬼の頃から

親方の手について居た私や仙とは違つて奴は渡り者、次第を云へば私等より一倍深く親方を有難い忝ないと思つて居なけりやならぬ筈、親方、姉御、私は悲しくなつて来ました、私は若しもの事があれば親方や姉御のためと云や黒煙の煽りを食つても飛び込むぐらゐの了見は持つて居るに、畜生ッ、あゝ人情無い野郎め、のつそりめ、彼奴は火の中へは恩を脊負つても入りきるまい、碌な根性は有つて居まい、あゝ人情無い畜生めだ、と酔が凶らず云ひ出せし不平の中に潜り込んで、めそ／＼めそ／＼泣き出せば、お吉は夫の顔を見て、例の癖が出て来たかと困つた風情は仕ながらも自己おのれの胸にもものつそりの憎さがあれば、幾分いくぶんかは清が言葉もつともを道理と聞く傾きもあるなるべし。

源太は腹に戸締の無きほど愚魯おろかならざれば、猪口さを擬しつけ高笑ひし、何を云ひ出した清吉、寝惚るな我の前だは、三の切

を出しても初まらぬぞ、其手で女でも口説きやれ、随分ころりと来るであらう、汝が惚けた小蝶さまの御部屋では無い、アツハ、と戯言おどけを云へば尚真面目に、木樁珠ずだまほどの涙を払ふ其手をぺたりと刺身皿の中につつこみ、しやくり上げしやくりあげ歔歔して泣き出し、あゝ情無い親方、私を酔漢よつぼらひあしらひは情無い、酔つては居ませぬ、小蝶なんぞは飲ばませぬ、左様いへば彼奴の面が何所かのつそりに似て居るやうで口惜くて情無い、のつそりは憎い奴、親方の対むかうを張つて大それた、五重の塔を生意気にも建てやうなんとは憎い奴憎い奴、親方が和やさし過ぎるので増長した謀反人め、謀反人も明智のやうなは道理もつともだと伯龍が講釈しましたが彼奴のやうなは大悪無道、親方は何日のつそりの頭を鉄扇で打ちました、何日いつ蘭丸にのつそりの領地を与やると云ひました、私は今に若も彼奴が親方の言葉に甘へて名を列べて塔を建てれば

打捨うつちやつては置けませぬ、擲たき殺して狗いぬに呉れます此様いふやうに擲き殺して、と明徳利の横面突然いきなり打ち飛ばせば、碎片かけらは散つて皿小鉢跳り出すやちん鏘然からり。馬鹿野郎め、と親方に大喝されて其儘にぐづりと坐り沈静おとなしく居るかと思へば、散かりし還原海苔もどしのりの上に額おしつけ既いびき鼾声なり。源太はこれに打笑ひ、愛嬌のある阿呆めに搔卷かけて遣れ、と云ひつゝ手酌にぐいと引かけて酒気を吹くこと良久しく、怒つて帰つて来はしたものゝ彼様あでは高が清吉同然、さて分別がまだ要るは。

其十八

源太が怒つて帰りし後、腕拱こまぬきて茫然たる夫の顔をさし覗き
て、吐息つくぐお浪は歎じ、親方様は怒らする仕事は畢竟手つまり

に入らず、夜の眼も合さず雛形まで製造へた幾日の骨折も苦勞も無益にした揚句の果に他の氣持を悪うして、恩知らず人情無しと人の口端にかゝるのは余りといへば情無い、女の差出た事をいふと唯一口に云はるゝか知らねど、正直律義も程のあるもの、親方様が彼程に云ふて下さる異見について一緒に仕たとて恥辱にはなるまいに、偏僻張つて何の詰らぬ意氣地立て、それを誰が感心なと褒ませう、親方様の御料簡につけば第一御恩ある親方の御心持もよい訳、またお前の名も上り苦勞骨折の甲斐も立つ訳、三方四方みな好いに何故其氣にはなられぬか、少しもお前の料簡が妾の腹には合点ぬ、能くまあ思案仕直して親方様の御異見についで従ふては下されぬか、お前が分別さへ更れば妾が直にも親方様のところへ行き、何にか彼にか謝罪云ふて一生懸命精一杯、打たれても擲かれても動くまい程覺悟をきめ、

謝罪つて謝罪つて謝罪り貫いたら御情深い親方様が、まさかに何日まで怒つてばかりも居られまい、一時の料簡違ひは堪忍して下さる事もあらう、分別仕更て意地張らずに、親方様の云はれた通り仕て見る気にはなられぬか、と夫思ひの一筋に口説くも女の道理なれど、十兵衛はなほ眼も動かさず、あゝもう云ふてくれるな、あゝ、五重塔とも云ふてくれるな、よしない事を思ひたつて成程恩知らずとも云はれう人情なしとも云はれう、それも十兵衛の分別が足らいで出来したこと、今更何共是非が無い、然し汝の云ふやうに思案仕更るは何しても厭、十兵衛が仕事に手下は使はうが助言は頼むまい、人の仕事の手下になつて使はれはせうが助言はすまい、榊組も椽配りも我が為る日には我の勝手、何所から何所まで一寸たりとも人の指揮は決して受けぬ、善いも悪いも一人で脊負つて立つ、他の仕事に使はれゝば

唯正直の手間取りとなつて渡されただけの事するばかり、生意
気な差出口は夢にもすまい、自分が主でも無い癖に自己おのが葉色
を際立て、異かはつた風を誇顔ほこりがの寄生木は十兵衛の虫が好かぬ、人
の仕事に寄生木となるも厭なら我が仕事に寄生木を容るゝも虫
が嫌へば是非がない、和しい源太親方が義理人情を噛み砕いて
態すめ々慇懃すめて下さるは我にも解つてありがたいが、なまじひ我の
心を生して寄生木あしらひは情無い、十兵衛は馬鹿でもものつそ
りでもよい、寄生木になつて栄えるは嫌ぢや、矮小けいちな下草したぐさにな
つて枯れもせう大樹おほきを頼まば肥料こやしにもならうが、たゞ寄生木に
なつて高く止まる奴等を日頃いくらも見ては卑い奴めと心中で
蔑視みさげて居たに、今我が自然親方の情に甘へて其になるのは如
何あつても小恥あれしうてなりきれぬは、いつその事に親方の指揮
のとほり此を削れ彼あれを挽き割れと使はるゝなら嬉しけれど、な

まじ情が却つて悲しい、汝も定めて解らぬ奴と恨みもせうが堪忍して呉れ、ゑゝ是非がない、解らぬところが十兵衛だ、此所がのつそりだ、馬鹿だ、白痴漢だ、何と云はれても仕方は無い、あゝッ火も小さくなつて寒うなつた、もうく寝てでも仕舞はうよ、と聴けば一と道理の述懐。お浪もかへす言葉なく無言となれば、尚寒き一室を照せる行燈も灯花に暗うなりにけり。

其十九

其夜は源太床に入りても中々眠らず、一番鶏二番鶏を耳たしかに聞て朝も平日よりつねは夙はやう起き、含嗽手水に見ぬ夢を洗つて熱茶一杯に酒の残り香を払ふ折しも、むくくうがひてうづと起き上つたる清吉寝惚眼ねぼれめをこすりく怪訝顔してまごつくに、お吉ともぐ

噴飯^{ふきだ}して笑ひ、清吉昨夜は如何したか、と黽^{なぶ}れば急に危坐^{かしこま}つて無茶苦茶に頭を下げ、つい御馳走^{わっち}になり過ぎて何時か知らず寝て仕舞ひました、姉御、昨夜私は何か悪いことでも為は仕ませぬか、と心配相に尋ぬるも可笑く、まあ何でも好いは、飯でも食つて仕事に行きやれ、と和^{やさ}しく云はれてますく畏^{おそ}れ、恍然^{うつとり}として腕を組み頻りに考へ込む風情、正直なるが可愛らし。

清吉を出しやりたる後、源太は尚も考にひとり沈みて日頃の快活^{さつぱり}とした調子に似もやらず、碌^さくお吉に口さへきかで思案に思案を凝らせしが、あゝ解^{なげ}つたと独り言するかと思へば、愍然^{ふびん}なと溜息つき、ゑゝ抛^{なげ}やうかと云ふかとおもへば、何して呉れうと腹立つ様子を傍にてお吉の見る辛さ、問ひ慰めんと口を出せば黙つて居よとやりこめられ、詮方なきに胸の中にて空しく心をいたむるばかり。源太は其等に関ひもせず夕暮方まで考へ

考へ、漸く思ひ定めやしけむ衝と身を起して衣服をあらため、
感応寺に行き上人に見えて昨夜の始終をば隠すことなく物語り
し末、一旦は私も余り解らぬ十兵衛の答に腹を立てしものゝ帰
つてよく／＼考ふれば、仮令ば私一人して立派に塔は建つるに
せよ、それでは折角御諭しを受けた甲斐無く源太がまた我慾に
ばかり強いやうで男児らしうも無い話し、といふて十兵衛は十
兵衛の思わくを滅多に捨はすまじき様子、彼も全く自己を押へ
て讓れば源太も自己を押へて彼に仕事をさせ下されと讓らねば
ならぬ義理人情、いろ／＼愚昧な考を使つて漸く案じ出したこ
とにも十兵衛が乗らねば仕方なく、それを怒つても恨むでも是
非の無い訳、はや既此上には変つた分別も私には出ませぬ、唯願ふ
はお上人様、仮令ば十兵衛一人に仰せつけられますればとて私
かならず何とも思ひますまいほどに、十兵衛になり私になり二

人共どうになり何様とも仰せつけられて下さりませ、御口づからの事なれば十兵衛も私も互に争ふ心は捨て居りまするほどに露さら故障はござりませぬ、我等二人の相談には余つて願ひにまゐりました、と実意を面に現しつゝ願へば上人はくく笑はれ、左様ぢやろ左様ぢやろ、流石に汝そなたも見上げた男ぢや、好いく、其心掛一つで既う生雲塔見事に建てたより立派に汝はなつて居る、十兵衛も先刻さつきに来て同じ事を云ふて帰つたは、彼も可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつて遣れ可愛がつて遣れ、と心あり氣に云はるゝ言葉を源太早くも合点して、ゑゝ可愛がつて遣りますとも、といと清すしげに答れば、上人満面皺にして悦び玉ひつ、好いは好いは、嗚呼氣味のよい男児ぢやな、と真から底から褒美ほめられて、勿体なさはあるながら源太おもはず頭をあげ、お蔭で男児になりましたか、と一語に無限の感慨を含め

て喜ぶ男泣き。既此時に十兵衛が仕事に助力せん心の、世に美しくも湧たるなるべし。

其二十

十兵衛感応寺にいたりて朗圓上人に見え、涙ながらに辞退の旨云ふて帰りし其日の味氣無さ、煙草のむだけの氣も動かすに力無く、茫然ぼんやりとしてつくぐ我が身の薄命ふしあはせ、浮世の渡りぐるしき事など思ひ廻めぐらせば思ひ廻すほど嬉しからず、時刻になりて食ふ飯の味が今更かは異れるではなけれど、箸持つ手さへ躊躇たゆたひ勝にて舌が美味うまうは受けとらぬに、平常つねは六碗七碗を快う喫くひしも僅に一碗二碗で終へ、茶ばかり却つて多く飲むも、心に不悦まづさの有る人の免れ難き慣例ならひなり。

主人が浮かねば女房も、何の罪なき頑要ざかりの猪之まで自然あるじと浮き立たず、淋しき貧家のいと淋しく、希望も無ければ快樂のぞみも一点あらで日を暮らし、暖味のない夢に物寂た夜を明かしけるが、お浪曉天あかつきの鐘に眼覚めて猪之と一所に寐たる床より密そつと出るも、朝風の寒いに火の無い中から起すまじ、も少し睡ねさせて置かうとの慈やさしき親の心なるに、何も彼も知らいでたわい無く寐て居し平生いつもとは違ひ、如何せしことやら忽ち飛び起き、襦袢一つで夜具の上跳ね廻り跳ね廻り、厭ぢやい厭ぢやい、父様を打つちや厭ぢやい、と蕨わらびのやうな手を眼にあてゝ何かは知らず泣き出せば、ゑゝこれ猪之は何したもので、と吃驚しながら抱き止むるに抱かれながらも猶泣き止まず。誰も父様を打ち仕ませぬ、夢でも見たか、それそこに父様はまだ寐て居らるゝ、と顔を押向け知らすれば不思議さうに覗き込で、漸く安心しは

仕てもまだ疑惑うたがひの晴れぬ様子。

猪之や何にも有りはし無いは、夢を見たのぢや、さあ寒いに風邪をひいてはなりませぬ、床に這入つて寐て居るがよい、と引き倒すやうにして横にならせ、搔卷かけて隙間無きやう上から押しつけ遣る母の顔を見ながら眼をぱつちり、あゝ怖かつた、今他所よその怖い人が。おゝおゝ、如何か仕ましたか。大きな、大きな鉄槌げんのうで、黙つて坐つて居る父様の、頭を打つて幾度いくつも打つて、頭が半分碎こはれたので坊は大変吃驚した。ゑゝ鶴亀こもてゝゝ、厭なこと、延喜えんぎでも無いことを云ふ、と眉を皺むる折も折、戸外を通る納豆売りの戦ふるへ声に覚えある奴が、ちエツ忌々しい草鞋が切れた、と打独語うちつぶやきて行き過ぐるに女房ますくゝ気色あしを悪くし、台所に出て釜の下を焚きつくれば思ふ如く燃えざる薪まきも腹立しく、引窓の滑よく明かぬも今更のやうに焦れつたく、嗚呼何と

なく厭な日と思ふも心からぞとは知りながら、猶氣になる事のみ氣にすればにや多けれど、また云ひ出さば笑はれむと自分でしか呵つて平日よりは笑顔をつくり言葉にも活氣をもたせ、いさく澆々として夫をあしらひ子をあしらへど、根が態とせし偽飾いつはりなれば却つて笑ひの尻声うれひが憂愁の響きを遺して去る光景ありさまの悲しげなところへ、十兵衛殿お宅か、と押柄あふへいに大人びた口きゝながら這入り来る小坊主、高慢にちよこんと上り込み、御用あるにつき直と来られべしと前後あとしき無しの棒口上。

お浪も不審、十兵衛も分らぬことに思へども辞いなみもならねば、既はや感応寺の門くゞるさへ無益むやくしくは考へつゝも、何御用ぞと行つて問へば、天地顛倒どうこりや何ぢや、夢か現か真実か、圓道右に爲右衛門左に朗圓上人中央まんなかに坐したまふて、圓道言葉おごそかに、此度こんりふ建立なるところの生雲塔の一切工事川越源太に任せら

れべき筈のところ、方丈思しめし寄らるゝことあり格別の御詮議例外の御慈悲をもつて、十兵衛其方に確しかと御任せ相成る、辞退の儀は決して無用なり、早々ありがたく御受申せ、と云ひ渡さるゝそれさへあるに、上人皺枯れたる御声にて、これ十兵衛よ、思ふ存分仕遂しとげて見い、好う仕上らば嬉しいぞよ、と荷担になふに余る冥加の御言葉。のつそりハツと俯伏せしまゝ五体を濤なみと動ゆるがして、十兵衛めが生命はさ、さ、さし出しまする、と云ひし限り喉塞のどふさがりて言語絶え、岑閑しんかんとせし広座敷に何をか語る呼吸かすかの響き幽にしてまた人の耳に徹しぬ。

其二十一

紅蓮白蓮の香にほひゆかしく衣袂たもとに裾に薰り来て、浮葉に露の玉動ゆらぎ

立葉に風の軟吹ける面白の夏の眺望は、赤蜻蛉菱藻を𦏧り初霜
向ふが岡の樹梢を染めてより全然と無くなつたれど、赭色にな
りて荷の茎ばかり情無う立てる間に、世を忍び氣の白鷺が徐々
と歩む姿もをかしく、紺青色に暮れて行く天に漸く輝り出す星
を脊中に擦つて飛ぶ雁の、鳴き渡る音も趣味ある不忍の池の景
色を下物の外の下物にして、客に酒をば亀の子ほど飲ます蓬
菜屋の裏二階に、氣持の好きさうな顔して欣然と人を待つ男一
人。唐棧揃ひの淡泊づくりに住吉張の銀煙管おとなしきは、職
人らしき俠氣の風の言語拳動に見えながら毫末も下卑ぬ上品質、
いづれ親方々と多くのものに立らるゝ棟梁株とは、予てから
知り居る馴染のお傳といふ女が、嘸お待ち遠でござりませう、
と膳を置つゝ云ふ世辞を、待つ退屈さに捕へて、待遠でく堪
りきれぬ、ほんとに人の氣も知らないで何をして居るであらう、

と云へば、それでもお化粧しまひに手間の取れまするが無理は無い筈、と云ひさしてホ、と笑ふ慣れきつた返しの太刀筋。アハ、それもつともも道理ぢや、今に來たらば能く見て呉れ、まあ恐らく此地こゝ辺に類は無らう、といふものだ。阿呀おや恐ろしい、何を散財おごつて下さります、而そして親方、といふものは御師匠さまでですか。いゝや。娘さんですか。いゝや。後家様。いゝや。お婆さんですか。馬鹿を云へ可愛想に。では赤ん坊。此奴こいつめ人をからかふな、ハ、ハ、。ホ、ホ、と下らなく笑ふところへ襖の外から、お傳さんと名を呼んで御連様と知らすれば、立上つて唐紙明けにかゝりながら一寸後向いて人の顔へ異おつに眼を呉れ無言で笑ふは、御嬉しかると調戲からかつて焦らして底悦そこえつき喜さする冗談なれど、源太は却しんつて心から可笑をかく思ふとも知らずにお傳はすいと明くれば、のろりと入り来る客は色ある新造どころか香も艶もなき無骨男、

ぼうく、頭髮あたまのごりく、腮髻ひげ、面かほは汚れて衣服きものは垢づき破れたる見るから厭氣えんきのぞつとたつ程な様子に、流石呆れて挨拶さへどぎまぎせしまゝ急には出ず。

源太は笑ゑみを含みながら、さあ十兵衛此所へ来て呉れ、関ふことは無い大胡坐おほあぐらで楽に居て呉れ、とおづくし居るを無理に坐すに居ゑ、頓やがて膳部ぜんぶも具備そなはりし後、さてあらためて飲み干したる酒盃さかずきとつて源太は擬さし、沈黙だんまりで居る十兵衛に對ひ、十兵衛、先刻に富松を態々遣つて此様こんな所に来て貰つたは、何でも無い、実は仲直り仕て貰ひたくてだ、何か汝とわつさり飲んで互ひの胸を和熟させ、過日こひひだの夜の我が云ふた彼云ひ過ぎも忘れて貰ひたいとおもふからの事、聞て呉れ斯様いふ訳だ、過日の夜は実は我も余り汝を解らぬ奴と一途に思つて腹も立つた、恥しいが肝癪かんさくも起し業も沸にやし汝の頭を打碎ぶつかいて遣りたいほどにまでも思

ふたが、然し幸福しあはせに源太の頭が悪玉にばかりは乗取られず、清吉めが家へ来て酔つた揚句に云ひちらした無茶苦茶を、嗚呼了見の小さい奴は詰らぬ事を理屈らしく恥かしくも無く云ふものだと、聞て居るさへ可笑くて堪らなさに不図左様思つた其途端、其夜汝の家で陳ならべ立つて来た我の云ひ草に気が付いて見れば清吉が言葉と似たり寄つたり、ゑゝ間違つた一時の腹立に捲き込まれたか残念、源太男が廃すたる、意地が立たぬ、上人の蔑視さげすみも恐ろしい、十兵衛が何も彼も捨て辞退するものを斜はすに取つて逆意地たてれば大間違ひ、とは思つても余り汝の解らな過ぎるが腹立しく、四方八方何所から何所まで考へて、此所を推せば其所に襞ひずみ積あすこが出る、彼点を立てれば此点こゝに無理があると、まあ我の智慧分別ありたけ尽して我の為ばかり籌はかるでは無く云ふたことを、無下むげに云ひ消されたが忌々しくて忌々しくて随分堪忍がまんも仕

かねたが、扱あつかいよく、了見を定めて上人様の御眼にかゝり所存を申し上げて見れば、好いよくと仰せられた唯の一言に雲霧もやぐもは既もう無くなつて、清すしい風が大空を吹いて居るやうな心持になつたは、昨日はまた上人様から熊くまの御招で、行つて見たれば我を御賞美の御言葉数々の其上、いよく十兵衛に普請一切申しつけたが蔭になつて助けてやれ、皆みな汝の善根福種になるのぢや、十兵衛が手には職人もあるまい、彼がいよく取掛る日には何人いくも備ふ其中に汝が手下の者も交らう、必ず猜忌そねみひがみ邪曲など起さぬやうに其等には汝から能く云ひ含めて遣るがよいとの細い御諭し、何から何まで見透しで御慈悲深い上人様のありがたさにつくく我折つて帰つて来たが、十兵衛、過日こなひだの云ひ過いままでごしは堪忍して呉れ、斯様した我の心意氣が解つて呉れたら従来通り淨く睦つきあじく交際つきあつて貰はう、一切が斯様定つて見れば何と思つた

彼と思つたは皆夢の中の物詮議、後に遺して面倒こそあれ益無やくいこと、此不忍の池水にさらりと流して我も忘れう、十兵衛汝も忘れて呉れ、木材きしなの引合ひ、鳶人足とびへの渡りなんど、まだ顔を売込んで居ぬ汝には一寸仕憎からうが、其等には我の顔も貸さうし手も貸さう、丸丁、山六、遠州屋、好い問屋は皆馴染で無うては先方さきが此方を呑んでならねば、万事齒痒い事の無いやう我を自由に出しに使へ、め組の頭の鋭次といふは短気なは汝も知つて居るであらうが、骨は黒鉄くろがね、性根玉は憚りながら火の玉だと平常ふだん云ふだけ、扱あじつくり頼めばぐつと引受け一寸退かぬ頼母しい男、塔は何より地行が大事、空風火水の四ツを受ける地盤の固めを彼にさせれば、火の玉鋭次が根性だけでも不動が台座の岩より堅く基礎いしずゑ確と据さすると諸肌ぬいで仕て呉るゝは必定、彼あれにも頼て紹介ひきあはせう、既此様なつた暁には源太が望みは

唯一ツ、天晴十兵衛汝が能く仕出来しさへすりや其で好のぢや、
唯々塔さへ能く成れば其に越した嬉しいことは無い、苟且にもかりそめ
百年千年末世に残つて云はゞ我等の弟子筋の奴等が眼にも入る
ものに、へまがあつては悲しからうではないか、情無いではな
からうか、源太十兵衛時代には此様な下らぬ建物に泣たり笑つ
たり仕たさうなと云はれる日には、なあ十兵衛、二人が舍利もしやり
魂魄も粉灰にされて消し飛ばさるゝは、拙な細工で世に出ぬはたましひ
恥も却つて少ないが、遺したものを弟子め等に笑はる日には馬
鹿親父が息子に異見さるゝと同じく、親に異見を食ふ子より何
段増して恥かしかる、生磔刑より死んだ後塩漬の上磔刑になるいきばりつけ
やうな目にあつてはならぬ、初めは我も是程に深くも思ひ寄ら
なんだが、汝が我の対面むかうにたつた其意気張から、十兵衛に塔建
てさせ見よ源太に劣りはすまいといふか、源太が建てゝ見せく

れう何十兵衛に劣らうぞと、腹の底には木を鑽^きつて出した火で
観る先の先、我意は何も無くなつた唯だ好く成て呉れさへすれ
ば汝も名誉^{ほまれ}我も悦び、今日は是だけ云ひたいばかり、嗚呼十兵
衛其大きな眼を湿ませて聴て呉れたか嬉しいやい、と磨いて礪^と
いで礪^{きつすゐ}ぎ出した純粹江戸ッ子粘り氣無し、一で無ければ六と出
る、忿怒^{いかり}の裏の温和^{やさし}さも飽まで強き源太が言葉に、身動^{じろ}ぎさへ
せで聞き居し十兵衛、何も云はず昼に食ひつき、親方、堪忍し
て下され口がきけませぬ、十兵衛には口がきけませぬ、こ、こ、
此通り、あゝ有り難うござりまする、と愚魯^{おろか}しくもまた真実^{まこと}に
唯平^{ひれふ}伏して泣き居たり。

言葉は無くても真情まことは見ゆる十兵衛が拳動そぶりに源太は悦び、春風湖みづを渡つて霞日に蒸すともいふべき温和の景色を面にあらはし、尚もやさしき語気円暢なだらかに、斯様打解けて仕舞ふた上は互にまづい不妙ことも無く、上人様の思召にも叶ひ我等おれたちの一分も皆立つといふものの、嗚呼何にせよ好い心持、十兵衛汝きさまも過してくれ、我も充分今日こそ酔はう、と云ひつゝ立つて違棚に載せて置たる風呂敷包とりおろし、結び目ふたつかねといて二束にせし書類かきものいだし、十兵衛が前に置き、我にあつては要なき此品これの、一ツは面倒な材木きしなの委細くはしい当りを調べたのやら、人足軽子其他種さまぐの入目を幾晩かかゝつて漸く調べあげた積り書、又一ツは彼所あそこを何して此所こゝを斯してと工夫に工夫した下絵図、腰屋根の地割だけなもあり、平地割だけなもあり、初重の仕形だけのもあり、二手先しやうるあほりものまたは三手先だしぐみ、出組ばかりなるもあり、雲形波形唐草生類彫物のみを

書きしもあり、何より彼より面倒なる真柱から内法長押腰長押
切目長押に半長押、椽板椽かつら亀腹柱高欄垂木桝肘木、貫や
ら角木すみぎの割合算法、墨繩すみづなの引きやう規尺かねの取り様余さず洩さず
記せしもあり、中には我の為しならで家に秘めたる先祖の遺品かたみ、
外へは出せぬ絵図もあり、京都やら奈良の堂塔を写しとりたる
ものもあり、此等は悉皆汝みんなに預くる、見たらば何かの足しにも
なる、と自己おのが精神を籠めたるものを惜気もなしに譲りあたふ
る、胸の広さの頼母しきを解せぬといふにはあらざれど、のつ
そりもまた一ト気性、他の巾着で我が口濡らすやうな事は好ま
ず、親方まことに有り難うはござりまするが、御親切は頂戴いたゞい
たも同然、これは其方に御納めを、と心は左程に無けれども言
葉に膠にべの無き過ぎる返辞をすれば、源太大きに悦ばず。此品これを
ば汝は要らぬと云ふのか、と慍いかりを底に匿して問ふに、のつそり

左様とは氣もつかねば、別段拝借いたしても、と一句迂濶^{うつか}り答ふる途端、鋭き氣性の源太は堪らず、親切の上親切を尽して我が智慧思案を凝らせし絵図まで与らむといふものを、無下に返すか慮外なり、何程自己^{おのれ}が手腕の好て他の好情^{なさけ}を無にするか、そも／＼最初に汝^{おのれ}めが我が対岸へ廻はりし時にも腹は立ちしが、じつと堪へて争はず、普通^{なみたいてい}大体のものならば我が庇蔭^{かげ}被たる身をもつて一つ仕事に手を入るゝか、打擲いても飽かぬ奴と、怒つて怒つて何にも為べきを、可愛きものにおもへばこそ一言半句の厭味も云はず、唯々自然の成行に任せ置きしを忘れし歟、上人様の御諭しを受けての後も分別に分別渴らしてわざ／＼出掛け、汝のために相談^{がまん}をかけてやりしも勝手の意地張り、大体^{たいてい}ならぬものとても堪忍^{がまん}なるべきところならぬを、よく／＼汝を最惜^{いと}がればぞ踏み耐へたるとも知らざる歟、汝が運の好きのみ

にて汝が手腕の好きのみにて汝が心の正直のみにて、上人様より今度の工事しごと命けられしと思ひ居る歟、此品をば与つて此源太が恩がましくでも思ふと思ふか、乃至は既慢氣もはやの萌して頭てんから何の詰らぬ者と人の絵図をも易く思ふか、取らぬとあるに強はせじ、余りといへば人情なき奴、あゝ有り難うござりますると喜び受けて此中の仕様を一所二所は用ひし上に、彼箇所は御蔭で美うまう行きましたと後で挨拶するほどの事はあつても当然なるに、開けて見もせず覗きもせず、知れ切つたると云はぬばかりに愛想も菅すがもなく要らぬとは、汝十兵衛よくも撥ねたの、此源太が仕た図の中に汝の知つた者のみ有らうや、汝等うぬらが工風の輪の外に源太が跳り出ずに有らうか、見るに足らぬと其方で思はば汝が手筋も知れてある、大方高の知れた塔建たぬ前から眼に映うつつて気の毒ながら批難なんもある、既堪忍の緒も断れたり、卑劣きたな

い返報^{かへし}は為まいなれど源太が烈しい意趣返報は、為る時為さで置くべき歟、酸くなるほどに今までは口もきいたが既きかぬ、一旦思ひ捨つる上は口きくほどの未練も有たぬ、三年なりとも十年なりとも返報^{しかへし}するに充分な事のあるまで、物蔭から眼を光らして睨みつめ無言でじつと待つてゝ呉れうと、気性が違へば思はくも一二度終に三度めで無残至極に齟齬^{くちが}ひ、いと物静に言葉を下めて、十兵衛殿、と殿の字を急につけ出し叮嚀に、要らぬといふ凶は仕舞ひましよ、汝一人で建つる塔定めて立派に出来やうが、地震か風の有らう時壊るゝことは有るまいな、と軽くは云へど深く嘲ける語^{ことば}に十兵衛も快よからず、のつそりでも恥辱^{はぢ}は知つて居ります、と底力味ある楔^{くさび}を打てば、中々見事な一言ぢや、忘れぬやうに記憶^{おぼ}えて居やうと、釘をさしつゝ恐ろしく睥みて後は物云はず、頓て忽ち立ち上つて、嗚呼飛んでも

無い事を忘れた、十兵衛殿寛りと遊んで居て呉れ、我は帰らねばならぬこと思ひ出した、と風の如くに其座を去り、あれといふ間に推量勘定、幾金か遺して風と出つ、直其足で同じ町の某家が闕またぐや否、厭だく、厭だく、詰らぬ下らぬ馬鹿くしい、愚図くせずと酒もて来い、蠟燭いぢつて其が食へるか、鈍痴め肴で酒が飲めるか、小兼春吉お房蝶子四の五の云はせず掴むで来い、臍の達者な若い衆頼も、我家へ行て清、仙、鐵、政、誰でも彼でも直に遊びに遣こすやう、といふ片手間にぐいぐい仰飲る間も無く入り来る女共に、今晚なぞとは手ぬるいぞ、と驀向から焦躁を吹つ掛けて、飲め、酒は車懸り、猪口は巴と廻せ廻せ、お房外見をするな、春婆大人ぶるな、ゑゝお蝶め其でも血が循環つて居るのか頭上に鼬花火載せて火をつくるぞ、さあ歌へ、ぢやんくと遣れ、小兼め気持の好い声を出

す、あぐり踊るか、かぐりもつと跳ねろ、やあ清吉来たか鐵も
来たか、何でも好い滅茶々々に騒げ、我に嬉しい事が有るのだ、
無礼講に遣れく、と大将無法の元氣なれば、後れて来たる仙
も政も煙けふに巻かれて浮かれたち、天井抜けうが根太抜けうが抜
けたら此方の御手のものと、飛ぶやら舞ふやら唸るやら、潮来いたこ
出島でしまもしほらしからず、甚句ときに鬨ときの声を湧かし、かつぽれに滑
つて転倒ころび、手品てづまの太鼓を杯洗で鐵がたゝけば、清吉はお房が
傍に寐転かんざしんで銀釵そのよにお前其様に酢ばかり飲んでを稽古する馬鹿
騒ぎの中で、一了簡あり顔の政が木遣を丸めたやうな声しなが
ら、北に峨々たる青山をと異おつなことを吐き出す勝手三昧、やつ
ちやもつちやの末は拳も下卑て、乳房ちちの脹れた奴が臍の下に紙
幕張るほどになれば、さあもう此処は切り上げてと源太が一言、
それから先は何所へやら。

其二十三

蒼鷺^{たか}の飛ぶ時他所^{よそ}視はなさず、鶴なら鶴の一点張りに雲をも
穿^{うが}ち風にも逆^{むか}つて目ざす獲物の、咽喉^{しご}仏把^{ひつ}攬^{つか}までは合点せざる
ものなり。十兵衛いよく、五重塔の工事^{しごと}するに定まつてより寐
ても起きても其事^{それざんまい}三昧、朝の飯喫ふにも心の中では塔を噬^かみ、夜
の夢結ぶにも魂魄^{たましひ}は九輪の頂を繞るほどなれば、況して仕事に
かゝつては妻あることも忘れ果て児のあることも忘れ果て、昨
日の我を念頭に浮べもせず明日の我を想ひもなさず、唯一^{てう}鉞^なふ
りあげて木を伐るときは満身の力を其に籠め、一枚の図をひく
時には一心の誠を其に注ぎ、五尺の身体こそ犬鳴き鶏歌ひ權兵
衛が家に吉慶^{よろこび}あれば木工^{もくゑもん}右衛門が所に悲哀^{かなしみ}ある俗世に在りもす

れ、精神こゝろは紛こたる因縁いん縁に奪とられて必死とばかり勤め励めば、前さきの夜源太に面白からず思はれしことの氣にかゝらぬにはあらざれど、日頃ののつそり益々長じて、既何処にか風吹きたりし位に自然軽う取り做し、頓ては頓と打ち忘れ、唯々仕事にのみ掛りしは愚おろかななるだけ情に鈍くて、一条道より外へは駈けぬ老牛の痴に似たりけり。

金箔銀箔瑠璃真珠水精すめしやう以上合せて五宝、丁子沈香白膠薰陸白檀ちやうじぢんかうはくきやうくんろがやくだん

以上合せて五香、其他五葉五穀まで備へて大土祖神おほつちみおやのかみはにやまひこのかみはにやま埴山彦神はにやまひこ埴山彦

あらゆる鎮護の神々を祭る地鎮の式もすみ、地曳土取故障なく、さ

て竜伏いしずゑは其月の生氣の方より右旋りに次第据ゑ行き五星を祭り、鉦てうな

初めの大札には鍛冶の道をば創められし天の目一箇の命あま まひとつ みこと、番匠の道

關ひらかれし手置帆負ておきほおひの命みこと彦狭知の命あま ひこさちより思兼の命おもひかね天児屋根の命あまつこやね太

玉の命、木の神といふ句くゝ、廼馳のちの神まで七神祭りて、其次の清匏の
 礼も首尾よく済み、東方提頭とうぼうたいとらだち頼吒持國天王、西方尾嚕さいはうびろしやくわう又廣目天王、
 南方毘留勒なんぼうびろしやくわう又增長天、北方毘沙門多聞天王、四天にかたどる四
 方の柱千年万年動ゆるぐなと祈り定むる柱立式、天星色星多願てんせいしきせいたぐわんの玉
 女三神、貪狼巨門等北斗の七星を祭りて願ふ永久安護、順に柱
 の仮轄かりくさびを三ツづゝ打つて協司わきつかさに打ち緊めさする十兵衛は、幾干いくそ
 の苦心も此所まで運きたべば垢穢きたなき顔にも光の出るほど喜悅よろこびに氣の勇
 み立ち、動きなき下津盤根しもついはねの太柱と式にて唱ふる古歌さへも、
 何とはなしにつくぐ嬉ふたたびしく、身を立つる世のためしぞと其下しも
 の句を吟ずるにも莞爾にくくしつゝ二度し、壇に向ふて礼拝つゝし恭み、拍
 手の音清く響かし一切成就の祓を終る此所の光景さまには引きかへ
 て、源太が家の物淋しさ。

主人は男の心強く思ひを外には現さねど、お吉は何程さばけ

たりとて流石女の胸小さく、出入るものに感應寺の塔の地曳の
今日濟みたり柱立式昨日濟みしと聞く度ごとに忌々敷、嫉妬の
ほむら
火炎衝き上がりて、汝十兵衛恩知らずめ、良人の心の広いのを
よい事にして付上り、うま／＼名を揚げ身を立るか、よし名の
揚り身の立たば差詰礼にも来べき筈を、知らぬ顔して鼻高くと
其日／＼を送りくさる歟、余りに性質の好過ぎたる良人も良人
なら面憎きのつそりめもまたのつそりめと、折にふれては八重
縦横に癩癩の虫跳ね廻らし、自己が小鬢の後毛上げて、ゑゑ
焦つたいと罪の無き髪を掻きむしり、一文貰ひに乞食が来ても
甲張り声に酷く謝絶りなどしけるが、或日源太が不在のところ
へ心易き医者道益といふ饒舌坊主遊びに來りて、四方八方の話
このあひだ
の末、或人に連れられて過般蓬萊屋へまゐりましたが、お傳と
いふ女からきゝました一分始終、いやどうも此方の棟梁は違つ

たもの、えらいもの、男児は左様あり度と感服いたしました、と御世辞半分何の気なしに云ひ出でし詞を、手繰つて其夜の仔細をきけば、知らずに居てさへ口惜しきに知つては重々憎き十兵衛、お吉いよく腹を立ちぬ。

其二十四

清吉^{そなた}汝は腑甲斐無い、意地も察しも無い男、何故私には打明けて過般^{こなひだ}の夜の始末をば今まで話して呉れ無かつた、私に聞かして気の毒^{おつ}と異に遠慮をしたものか、余りといへば狭隘^{けち}な根性、よしや仔細を聴たとてまさか私が狼狽^{うろたへ}まはり動転するやうなことはせぬに、女と輕しめて何事も知らせずに置き隠し立して置く良人^{うちのひと}の了簡は兎も角も、汝等^{そなたたち}まで私を聾に盲目にして済して

居るとは余りな仕打、また親方の腹の中がみすく知れて居ながらに平氣の平左で酒に浮かれ、女郎買の供するばかりが男の能でもあるまいに、長閑のんき氣で斯して遊びに来るとは、清吉おまへ汝もおめでたいの、平生いつもは不在るすでも飲ませるところだが今日は私は関へない、海苔一枚焼いて遣るも厭なら下らぬ世間咄しの相手するも虫が嫌ふ、飲みたくば勝手に台所へ行つて呑口ひねりや、談話が仕たくば猫でも相手に為るがよい、と何も知らぬ清吉、道益が帰りし跡へ偶然ふと行き合はせて散々にお吉が不機嫌を浴せかけられ、訳も了らず驚きあきれて、へどもどなしつゝ段々様子を問へば、自己おのれも知らずに今の今まで居し事なれど、聞けば成程何あつても堪忍がまんの成らぬのつそりの憎さ、生命と頼む我が親方に重々恩を被た身をもつて無遠慮過ぎた十兵衛めが処置振り、飽まで親切眞実の親方の顔蹈みつけたる憎さも憎し何し

て呉れう。

ム、親方と十兵衛とは相撲にならぬ身分の差ちがひ、のつそり相手に争つては夜光の壁たまを小礫いしころに擲ぶ付けるやうなものなれば、腹は十分立たれても分別強く堪へて堪へて、誰にも彼にも鬱憤を洩さず知らさず居らるゝなるべし、ゑゝ親方は情無い、他の奴は兎も角清吉だけには知らしても可さそうなものを、親方と十兵衛では此方が損、我とのつそりなら損は無い、よし、十兵衛め、たゞ置かうやと逸はやりきつたる鼻先思案。姉御、知らぬ中は是非が無い、堪忍して下され、様子知つては憚りながら既叱られては居りますまい、此清吉が女郎買の供するばかりを能の野郎か野郎で無いか見て居て下され、左様ならば、と後声しりごゑ烈しく云ひ捨て格子戸がらり明つ放し、草履も穿かず後も見ず風より疾く駆け去れば、お吉今さら氣遣はしくつゞいて追掛け呼びと

むる二^タ声三声、四声めには既影^{はや}さへも見えずなつたり。

其二十五

材^きを鉦^{はつ}る斧^{よき}の音、板削る鉋^ほの音、孔を鑿^ほるやら釘打つやら丁
こかち／＼響忙しく、木片^{こつぱ}は飛んで疾風に木の葉の飜^{ありさま}へるが如
く、鋸屑^{おがくづ}舞つて晴天に雪の降る感応寺境内普請場の景況賑やか
に、紺の腹掛頸筋に喰ひ込むやうなを懸けて小胯の切り上がつ
た股引いなせに、つつかけ草履の勇み姿、さも伶俐氣に働くも
あり、汚れ手拭肩にして日当りの好き場所に蹲踞み、悠々然と
鑿^とを硯^{なり}ぐ衣服^{きたな}の垢穢^きき爺もあり、道具搜しにまごつく小童^{わつぱ}、頻
りに木を挽割^{ひく}日傭取り、人さまぐの骨折り氣遣ひ、汗かき息
張る其中に、総棟梁ののつそり十兵衛、皆の仕事を監督^{みまは}りかた

ぐ、墨壺墨さし矩尺もつて胸三寸にある切組を実物にする指
図命令。いひつけ斯様かうぎ截れ彼様あゝほ穿れ、此処を何様して何様やつて其処に
是だけ勾配有たせよ、孕みが何寸凹みが何分と口でも知らせ墨繩
でも云はせ、面倒なるは板片に矩尺の仕様を書いて示し、鵜
の目鷹の目油断無く必死となりて自ら励み、今しも一人の若倭
に彫物の画を描き与らんと余念も無しに居しところへ、野猪いのししよ
りも尚疾く塵土ほこりを蹴立て、飛び来し清吉。

忿怒の面火玉の如くし逆釣つたる目を一段視開き、畜生、の
つそり、くたばれ、と大喝すれば十兵衛驚き、振り向く途端に
驀向まっかうより岩も裂けよと打下すは、ぎら／＼するまで研ぎ澄ませ
し鉾を縦に其柄にすげたる大工に取つての刀なれば、何かは堪
らむ避くる間足らず左の耳を殺ぎ落され肩先少し切り割かれし
が、仕損じたりと又蹈ふんご込んで打つを逃げつゝ、抛げ付くる釘箱

才槌墨壺矩尺、利器の無さに防ぐ術なく、身を翻へして退く機はずみに足を突込む道具箱、ぐざと踏み貫く五寸釘、思はず転ぶを得たりやと笠にかゝつて清吉が振り冠つたる鉾の刃先に夕日の光の閃きらりと宿つて空に知られぬ電光いなづまの、疾しや遅しや其時此時、背面うしろの方に乳虎にうこ一声、馬鹿め、と叫ぶ男あつて二間丸太に論も無く両脰脆く薙なぎ倒せば、倒れて益々怒る清吉、忽ち勃然むつくと起きんとする襟元把とつて、やい我われだは、血迷ふな此馬鹿め、と何の苦も無く鉾もぎ取り捨てながら上からぬつと出す顔は、八方睨おほまなこみの大眼、一文字口怒り鼻、渦巻縮れの両鬢は不動を欺くばかりの相形。

やあ火の玉の親分か、訳がある、打捨て置いて呉れ、と力を限り払ひ除けむと蹴もがき焦燥あせるを、栄螺さざえの如き拳固で鎮圧しづめ、ゑゝ、じたばたすれば拳殺はりころすぞ、馬鹿め。親分、情無い、此所を

此所を放して呉れ。馬鹿め。ゑゝ分らねへ、親分、彼奴を活しては置かれねへのだ。馬鹿野郎め、べそをかくのか、従順く仕なければ尚^{まだ}打つぞ。親分酷い。馬鹿め、やかましいは、拳殺すぞ。あんまり分らねへ、親分。馬鹿め、それ打つぞ。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親分。馬鹿め。放^{はな}。馬鹿め。お。馬鹿め馬鹿めくく、醜^{ざま}態を見ろ、従順くなつたらう、野郎我が家へ来い、やい何様した、野郎、やあ此奴は死んだな、詰らなく弱い奴だな、やあい、誰^{どいつ}奴か来い、肝心の時は逃げ出して今頃十兵衛が周囲に蟻^{たか}のやうに群つて何の役に立つ、馬鹿ども、此方には亡者が出来かゝつて居るのだ、鈍^{どち}遅め、水でも汲んで来て打^ぶ注^つけて遣れい、落ちた耳を拾つて居る奴があるものか、白痴め、汲んで来たか、関ふことは無い、一時に手桶の水不^{みな}残面^{づつ}へ打付ろ、此様野郎は脆く生る

ものだ、それ占めた、清吉ッ、確乎しつかりしろ、意地の無へ、どれく
此奴は我が背負つて行つて遣らう、十兵衛が肩の疵は浅からう
な、むゝ、よし／＼、馬鹿ども左様なら。

其二十六

源太居るかと思入り来る鋭次を、お吉立ち上つて、おゝ親分
さま、まあ／＼此方へと誘へば、ずつと通つて火鉢の前に無遠
慮の大胡坐かき、汲んで出さるゝ桜湯を半分ばかり飲み干して
お吉の顔を視、面色いろが悪いが何様かした歟、源太は何所ぞへ行
つたの歟、定めし既聴もうたであらうが清吉めが詰らぬ事を仕出来
しての、それ故一寸話があつて来たが、むゝ左様か、既十兵衛が
ところへ行つたと、ハ、ハ、ハ、敏捷すばやい／＼、流石に源太だは、我

の思案より先に身体が疾とつくに動いて居るなぞは頼母しい、なあに
お吉心配する事は無い、十兵衛と御上人様に源太が謝罪わびをして
な、自分の示しが足らなかつたで手下ての奴が飛だ心得違ひを仕
ました、幾重にも勘弁して下さいと三ツ四ツ頭を下げれば済ん
で仕舞ふ事だは、案じ過しはいらぬもの、其でも先方が愚図さき
といへば正面まともに源太が喧嘩を買つて破裂ばれの始末をつければ可い
さ、薄々聴いた噂では十兵衛も耳朶の一ツや半分斫きり奪られて
も恨まれぬ筈、随分清吉の輕躁行為おつちよこちよいも一寸をかしな可い洒落か
知れぬ、ハ、ハ、然し憫然かはいそに我の拳固を大分食つて咩うんく苦しがつ
て居るばかりか、十兵衛を殺した後は何様始末が着くと我に云
はれて漸く悟つたかして、噫悪かつた、逸り過ぎた間違つた事
をした、親方に頭を下げさするやうな事をした歟噫済あゝまないと、
自分の身体みうちの痛いみうちのより後悔にぼろ／＼涙を翻こぼして居る慙然ふびんさ

は、何と可愛い奴では無い歟、喃お吉、源太は酷く清吉を叱つて叱つて十兵衛が所へ謝罪あやまりに行けとまで云ふか知らぬが、其は表向の義理なりや是非は無いが、此所は汝おまへの儲け役、彼奴を何か、なあそれ、よしか、其所は源太を抱寝するほどのお吉様にわか了らぬことは無い寸法か、アハ、、、、源太が居ないで話も要らぬ、どれ帰らうかい御馳走は預けて置かう、用があつたら何日でもお出、とぼつ／＼語つて帰りし後、思へば済まぬことばかり。女の浅き心から分別も無く清吉に毒づきしが、逸りきつたる若き男の間違仕出して可憫あはれや清吉は自己おのれの世を狭め、わが身は大切だいじの所天ををまで憎うてならぬのつそりに謝罪らするやうなり行きしは、時の拍子の出来事ながら畢竟つまりは我が口より出し過失あやまち、兎せん角せん何とすべきと、火鉢の縁に凭もたする肘のついがつくりと滑るまで、我を忘れて思案に思案凝らせしが、思ひ

定めて、応左様ぢやと、立つて箆笥の大抽匣、明けて麝香じやかうの氣かと共に投げ出し取り出すたしなみの、帯はそもく此家こゝへ来し嬉し恥かし恐ろしの其時締めし、ゑゝそれよ。懇話ねだつて買つて貰ふたる博多に繻子に未練も無し、三枚重ねに忍ばるゝ往時むかしは罪の無い夢なり、今は苦勞の山繭縞やままゆじま、ひらりと飛ばす飛八丈此頃好みし毛万筋けまんすぢ、千筋百筋氣は乱るとも夫おもふは唯一筋、唯一筋の唐七糸帶からしゆつちんは、お屋敷奉公せし叔母が紀念かたみと大切に秘藏ひめたれど何か厭はむ手放すを、と何やら彼やら有たけ出して婢をんなに包ませ、夫の帰らぬ其中と櫛笄かうがいも手ばしこく小箱に纏めて、さて其品それを無残や余所の蔵に籠らせ、幾干かの金懷中に浅黄の頭巾小提灯、闇夜も恐れず鋭次が家に。

池の端の行き違ひよりからり翻然と変りし源太が腹の底、初めは可

愛う思ひしも今は小癩に障つてならぬ其十兵衛に、頭を下げ両手をついて謝罪らねばならぬ忌々しさ。さりとて打捨置かば清

吉の乱暴も我が命令けて為せし歟のやう疑がはれて、何も知ら

ぬ身に心地快からぬ濡衣被せられむ事の口惜しく、唯さへおも

しろからぬ此頃余計な魔がさして下らぬ心づか労ひを、馬鹿々々し

き清吉めが挙動ふるまひのために為ねばならぬ苦々しさに益々心平おだやか穩な

らねど、処さ弁く道の処弁かばで済むべき訳も無ければ、是も皆自

然に湧きし事、何とも是非なしと諦めて厭々ながら十兵衛が家

音問おとづれ、不慮の難をば訪ひ慰め、且は清吉を戒むること足らざ

りしを謝び、のつそり夫婦が様子を視るに十兵衛は例の無言三

昧、お浪は女の物やさしく、幸ひ傷も肩のは浅く大した事では

ござりませねば何卒^{どうぞ}お案じ下されますな、態々御見舞下されては実に恐れ入りまする、と如才なく口はきけど言葉遣ひのあらたまりて、自然^{おのづ}と何処かに稜角^{かど}あるは問はずと知れし胸の中、若しや源太が清吉に内々含めて為せし歟と疑ひ居るに極つたり。

忽ち業腹な、十兵衛も大方我を左様視て居るべし、疾時^{とくとき}機の来よ此源太が返報^{しかへし}仕様を見せて呉れむ、清吉ごとき卑劣^{けち}な野郎の爲た事に何似るべき歟、斬^{てうな}で片耳殺ぎ取る如き下らぬ事を我が爲うや、我が腹立は木片の火のぱつと燃え立ち直消ゆる、堪へも意地も無きやうなる事では済まさじ承知せじ、今日の変事は今日の変事、我が癩癩は我が癩癩、全で別なり関係^{かへりあひ}なし、源太が爲やうは知るとき知れ悟らする時悟らせ呉れむと、裏^{うち}にいよく不平は懷けど露塵ほども外には出さず、義理の挨拶見事に済まして直其足を感じ寺に向け、上人の御目通り願ひ、一応

自己が隸属みうちの者の不埒おわびを御謝罪し、我家に帰りて、卒いざこれよりは鋭次に会ひ、其時清を押へ呉たる礼をも演このちべつ其時の景状やうずをも聞きつ、又一ツには散々清を罵り叱つて以後我家に出入り無用と云ひつけ呉れむと立出掛け、お吉の居ぬを不審して何所へと問へば、何方ちよとへか一寸行て来るとてお出になりました、と何食はぬ顔で婢をんなの答へ、口禁くちどめされてなりとは知らねば、応左様歟、よし／＼、我は火の玉の兄あにきがところへ遊びに行たとお吉帰らば云ふて置け、と草履つつかけ出合ひがしら、胡麻竹の杖とぼく／＼と焼痕やけこげのある提灯片手、老の歩みの見る目笑止にへの字なりして此方へ来る婆。おゝ清の母親おふくろではないか。あ、親方様でしたか、

あゝ好いところで御眼にかゝりましたが何所どちらへか御出掛けでござりまするか、と忙し氣に老婆ばばが問ふに源太軽く会釈して、まあ能いは、遠慮せずと此方へ這入りやれ、態々夜道を拾ふて来たは何ぞ急の用か、聴いてあげやう、と立戻れば、ハイく、有り難うござります、御出掛けのところを済みません、御免下さいまし、ハイく、と云ひながら後に随いて格子戸くゞり、寒かつたらうに能う出て来たの、生憎お吉も居ないで関ふことも出来ぬが、縮ちぢまつて居ずとずつと前へ進でて火にでもあたるがよい、と親切に云ふてくるゝ源太が言葉に愈々身を堅くして縮まり、お構ひ下さいましては恐れ入りまする、ハイく、懷炉を入れて居りますれば是で恰好でござりまする、と意久地なく落かゝる水涕を洲の立つた半天の袖で拭きながら遙はるか下つて入口

近きところに蹲まり、何やら云ひ出したさうな素振り、源太早くも大方察して老婆としよりの心の中嘸かしと氣の毒さ堪らず、余計な事仕出して我に肝煎らせし清吉のお先走りを罵り懲らして、当分出入ならぬ由云ひに鋭次がところへ行かんとせし矢先であれど、視れば我が子を除いては阿彌陀様より他に親しい者も無かるべき孱弱かよわき婆のあはれにて、我清吉を突き放さば身は腰弱弓の弦つるに断れられし心地して、在るに甲斐なき生命ながらへむに張りも無く的にも無くなり、何程か悲み歎いて多くもあらぬ余生を愚痴の涙の時雨に暮らし、晴々とした氣持のする日も無くて終ることならむと、思ひ遣れば思ひ遣るだけ懨然ふびんさの増し、煙草捻つてつい居るに、婆は少しくにぢり出で、夜分まゐりまして実に済みませんが、あの少しお願い申したい訳のござりまして、ハイ、既御存知でもござりませうが彼清吉めが飛んだ

事をいたしましたさうで、ハイ／＼、鐵五郎様から大概は聞きました、平常からして気の逸い奴で、直に打つの斫きるのと騒ぎまして其度にひや／＼させます、お蔭かげさまで一人前にはなつて居りまして未だ兒童がきのやうな真一酷まいつこく、悪いことや曲つたことは決して仕ませぬが取り上せては分別の無くなる困つた奴やつこで、ハイ／＼、悪気は夢さら無い奴でござります、ハイ／＼其は御存知で、ハイ有り難うござります、何様いふ筋で喧嘩をいたしましたか知りませぬが大それた手斧てうななんぞを振り舞はしましたさうで、左様きゝました時は私が手斧で斫られたやうな心持がいたしました、め組の親分とやらが幸ひ抱き留めて下されましたとか、まあ責めてもでござります、相手が死にでもしましたら彼奴あれめは下手人、わたくしは彼を亡くして生きて居る瀬はござりませぬ、ハイ有り難うござります、彼めが幼少ちひさいときは烈ひど

い虫持^{むしもち}で苦勞をさせられましたも大抵ではござりませぬ、漸く中山の鬼子母神様の御利益で満足には育ちましたが、癒^{なづ}りましたら七歳までに御庭の土を踏ませませうと申して置きながら、遂何彼にかまけて御礼参りもいたさせなかつた其御罰か、丈夫にはなりましたが彼通の無鉄砲、毎々お世話をかけまする、今日も今日とて鐵五郎様がこれ／＼と搔摘^{ようい}んで話されました時の私の吃驚、刃物を準備^{ようい}までしてと聞いた時には、ゑゑ又かと思はずどつきり胸も裂けさうになりました、め組の親分様とかが預かつて下されたとあれば安心のやうなものゝ、清めは怪我はいたしませぬかと聞けば鐵様の曖昧な返辭、別条はない案じるなと云はるゝだけに猶案ぜられ、其親分の家を尋ねれば、其処へ汝^{おまへ}が行つたが好いか行かぬが可いか我には分らぬ、兎も角も親方様のところへ伺つて見ろと云ひつ放して歸つて仕舞はれ、

猶々胸がしく／＼痛んで居ても起ても居られませねば、留守を
隣家となりの傘張りに頼むでやうやく参りました、何うかめ組の親分
とやらの家を教へて下さいまし、ハイ／＼直にまゐりまするつ
もりで、何んな態して居りまするか、若しや却つて大怪我など
為て居るのではござりますまいか、よいものならば早う逢て安
堵したうござりまするし喧嘩の模様も聞きたうござりまする、
大丈夫曲つた事はよもやいたすまいと思ふて居りまするが若い
者の事、ひよつと筋の違つた意趣でゞも為た訳なら、相手の十
兵衛様に先此婆が一生懸命で謝罪り、婆は仮令如何されても惜
くない老耄おいぼれ、生先の長い彼奴あれめが人様に恨まれるやうなことの無
いやうに為ねばなりません、とおろ／＼涙になつての話し。始
終を知らで一ト筋に我子をおもふ老の繰言、此返答には源太こま
りぬ。

其二十九

八五郎其所に居るか、誰か来たやうだ明けてやれ、と云はれて、なんだ不思議な、女らしいぞと口の中で独語つひやきながら、誰だ女嫌ひの親分の所へ今頃来るのは、さあ這入りな、とがらりと戸を引き退くれば、八はッ様さんお世話、と軽い挨拶、提灯吹き滅けして頭巾を脱ぎにかゝるは、此盆にも此の正月にも心付して呉れたお吉と気がついて八五郎めんくらひ、素肌一枚どてらの袴まへ広がつて鼠色ねずみになりし犢鼻褌ふんどしの見ゆるを急に押し隠しなどしつ、親分、なんの、あの、なんの姉御だ、と忙しく奥へ声をかくるに、なんの尽しで分る江戸ッ児。応左様か、お吉来たの、能く来た、まあ其辺そこらの塵埃ごみの無さゝうなところへ坐つて呉れ、油虫が這

つて行くから用心しな、野郎ばかりの家は不潔きたないのが粧飾みえだから仕方が無い、我おれも汝おまへのやうな好い鼻でも持つたら清潔きれいに為やうよ、アハ、と笑へばお吉も笑ひながら、左様したらまた不潔きたないと嚴敷御叱きびしくおいぢめなさるか知れぬ、と互ひに二ツ三ツ冗話むだばなし仕て後、お吉少しく改まり、清吉は眠ねて居りまするか、何様いふ様子か見ても遣りたし、心にかゝれば参りました、と云へば鋭次も打領き、清は今がたすやくね睡着ねいて起きさうにも無い容態ぢやが、疵といふて別にあるでもなし頭の顱骨さくらを打破つた訳でもなければ、整骨ほねつぎ医師いしやの先刻云ふには、烈ひどく逆上したところを滅茶うちやくちに撲たれたため一時は氣絶までも為たれ、保証うけあひ大したことは無い由、見たくば一寸覗いて見よ、と先に立つて導く後につき行くお吉、三疊ばかりの部屋の中に一切夢で眠り居る清吉を見るに、顔も頭も膨れ上りて、此様に撲つてなしたる鋭次

の酷さが恨めしきまで可憫なる態なれど、済んだ事の是非も無く、座に戻つて鋭次に対ひ、我夫では必ず清吉が余計な手出しに腹を立ち、御上人様やら十兵衛への義理をかねて酷く叱るか出入りを禁むるか何とかするでござりませうが、元はといへば清吉が自分の意恨で仕たではなし、畢竟は此方の事のため、筋の違つた腹立をついむらくとしたのみなれば、妾は何も我夫のするばかりを見て居る訳には行かず、殊更少し訳あつて妾が何とか為てやらねば此胸の済まぬ仕誼もあり、それやこれやを種々と案じた末に浮んだは一年か半年ほど清吉に此地退かすること、人の噂も遠のいて我夫の機嫌も治つたら取成し様は幾干も有り、まづそれまでは上方あたりに遊んで居るやう為てやりたく、路用の金も調へて来ましたれば少しなれども御預け申しまする、何卒宜敷云ひ含めて清吉めに与つて下さりませ、我夫

は彼通り表裏の無い人、腹の底には如何思つても必ず辛く清吉に一旦あたるに違ひ無く、未練気なしに叱りませうが、其時何と清吉が仮令云ふても取り上げぬは知れたこと、傍から妾が口を出しても義理は義理なりや仕様は無し、さりとて慾で做出^し出来^でした咎でもないに男一人の寄り付く島も無いやうにして知らぬ顔では如何しても妾が居られませぬ、彼^{あれ}が一人の母のことは彼さへ居ねば我夫にも話して扶助^{たすく}るに厭は云はせまじく、また厭といふやうな分らぬことを云ひも仕ますまいなれば掛念はなけれど、妾が今夜来たことやら蔭で清をば魴^なることは、我夫へは当分秘密^{ないしよ}にして。解つた、えらい、もう用は無からう、お帰りく、源太が大抵来るかも知れぬ、撞^で見^{つく}しては拙^ちからう、と愛想は無けれど眞実はある言葉に、お吉嬉しく頼み置きて帰れば、其後へ引きちがへて来る源太、果して清吉に、出入^とりを禁むる

師弟の縁断るとの言ひ渡し。鋭次は笑つて黙り、清吉は泣て詫
びしが、其夜源太の帰りし跡、清吉鋭次にまた泣かせられて、狗
になつても我や姉御夫婦の門辺は去らぬと唸りける。

四五日過ぎて清吉は八五郎に送られ、箱根の温泉を志して江
戸を出しが、夫よりたどる東海道いたるは京か大阪の、夢はい
つでも東都^{あづま}なるべし。

其三十

十兵衛傷を負ふて帰つたる翌朝、平生^{いつも}の如く夙^とく起き出づれ
ばお浪驚いて急にとゞめ、まあ滅相な、緩^{ゆる}りと臥むでおいでな
されおいでなされ、今日は取りわけ朝風の冷たいに破傷風にで
もなつたら何となさる、どうか臥むで居て下され、お湯ももう

直沸きませうほどに含嗽うがひてうづ手水も其所で妾が為せてあげませう、
と破土竈やぶれべつひにかけたる羽虧はかけ釜の下焚きつけながら氣を揉んで云
へど、一向平氣の十兵衛笑つて、病人あしらひにされるまでの
事はない、手拭だけを絞つて貰へば顔も一人で洗ふたが好い氣
持ぢや、と箍たがの緩みし小盥に自ら水を汲み取りて、別段悩める
容態やうすも無く平日ふだんの如く振舞へば、お浪は呆れ且つ案ずるに、のつ
そり少しも頓着あさめしせず朝食終ふて立上り、突然衣物を脱ぎ捨て、
股引腹掛つけ着にかゝるを、飛んでも無い事何処へ行かるゝ、何程
仕事の大事ぢやとて昨日の今日は疵口の合ひもすまいし痛みも
去るまじ、泰然ぢつとして居よ身体を使ふな、仔細は無けれど治癒なほ
るまでは万般よろづつゝしみ要慎第一と云はれた御医者様の言葉さへあるに、
無理圧して感応寺に行かるゝ心か、強過ぎる、仮令行つたとて
働きはなるまじ、行かいでも誰が咎めう、行かで済まぬと思は

るゝなら妾が一寸^{ちよと}一ト走り、お上人様の御目にかゝつて三日四日の養生を直々に願ふて来ましよ、御慈悲深いお上人様の御承知なされぬ氣遣ひない、かならず大切^{だいじ}にせい輕挙^{かるはずみ}すなど仰やるは知れた事、さあ此衣^{これ}を着て家に引籠み、せめて疵口^{くち}の悉皆密着^{すつかりくつつ}くまで沈静^{おちつゐ}て居て下され、と只管とゞめ宥め慰め、脱ぎしをとつて復被^{またき}すれば、余計な世話を焼かずとよし、腹掛着せい、これは要らぬ、と利く右の手にて撥ね退くる。まあ左様云はずと家に居て、とまた打被する、撥ね退くる、男は意氣地女は情、言葉あらそひ果しなければ流石にのつそり少し怒つて、訳の分らぬ女の方で邪魔立てするか忌々しい奴、よし／＼頼まぬ一人で着る、高の知れたる蚯蚓^{みづづばれ}膨に一日なりとも仕事を休んで職人共の上に立てるか、汝^{うぬ}は少^{ちつと}も知るまいがの、此十兵衛はおろかしくて馬鹿と常々云はるゝ身故に職人共が輕う見て、眼の前で

は我が指揮さしづに従ひ働くやうなれど、蔭では勝手に怠惰なまけるやら譏そしるやら散々さんざんに茶ちやにして居て、表面うはへこそ粧つくりへ誰一人真実仕事を好くせうといふ意氣組持つて仕てくるゝものは無いは、ゑゝ情無い、如何かして虚飾みえで無しに骨を折つて貰ひたい、仕事に膏あぶらを乗せて貰ひたいと、諭せば頭は下げながら横向いて鼻で笑はれ、叱れば口に謝罪られて顔色かほづきに怒られ、つくぐゝ我折つて下手に出れば直と増長さるゝ口惜き悲しさ辛さ、毎日ゝ棟梁ゝと大勢に立てられるは立派で可けれど腹の中では泣きたいやうな事ばかり、いつそ穴鑿りあなうで引使はれたほうが苦しいと思ふ位、其中で何か斯こか此日まで運ばして来たに今日休んでは大事の躓つまずき、胸が痛いから早帰りします、頭痛がするで遅くなりましたと皆みんなに怠惰なまけられるは必定、其時自分が休んで居れば何と言云ひ様なく、仕事しごとが雨垂拍子になつて出来べきものも仕損ふ

道理、万が一にも仕損じてはお上人様源太親方に十兵衛の顔が向られうか、これ、生きても塔が成できねばな、此十兵衛は死んだ同然、死んでも業を仕遂げれば汝が夫は生うぬて居おやぢるはい、二寸三寸の手斧傷に臥て居られるか居られぬ歟、破傷風が怖しい歟仕事しごとの出来ぬが怖しい歟、よしや片腕奪られたとて一切成就の曉までは駕籠に乗つても行かでは居ぬ、ましてや是しきの蚯蚓くわん膨ふに、と云ひつゝお浪が手中より奪ひとつたる腹掛に、左の手を通さんとして顰しかむる顔、見るに女房の争へず、争ひまけて傷をいたはり、遂に半天股引まで着せて出しける心の中、何とも口には云ひがたかるべし。

十兵衛よもや来はせじと思ひ合ふたる職人共、ちらりほらりと辰の刻頃より来て見て吃驚する途端、精出して呉るゝ嬉しいぞ、との一言を十兵衛から受けて皆冷汗をかきけるが、是より

一同^{みなく}励み勤め昨日に変わる身のこなし、一をきいては三まで働き、二と云はれしには四まで動けば、のつそり片腕の用を欠いて却て多くの腕を得つ日ゝ工事^{しごと}抄取り、肩疵治る頃には大抵塔も成^{でき}あがりぬ。

其三十一

時は一月の末つ方、のつそり十兵衛が辛苦経営むなしからで、感応寺生雲塔いよく物の見事に出来上り、段々足場を取り除けば次第々々に露るゝ一階一階また一階、五重巍然^{ぎぜん}と聳えしさま、金剛力士が魔軍を睥睨^{にら}んで十六丈の姿を現じ坤軸動^{こんちくゆう}がす足ぶみして巖上^{いはほ}に突立ちたるごとく、天晴立派に建つたる哉、あら快よき細工振りかな、希有ぢや未曾有^{また}ぢや再あるまじと爲右

衛門より門番までも、初手のつそりを輕しめたる事は忘れて讃歎すれば、圓道はじめ一山いっさんの僧徒も躍りあがつて歡喜よろこび、これでこそ感應寺の五重塔なれ、あら嬉しや、我等が頼む師は当世に肩を比すべき人も無く、八宗九宗の碩德達虎豹鶴鷺せきとくたちこへうかくろと勝ぐれたまへる中にも絶類拔群にて、譬へば獅子王孔雀王、我等が頼む此寺の塔も絶類拔群にて、奈良や京都はいざ知らず上野淺草芝山内、江戸にて此塔これに勝るものなし、殊更塵土に埋もれて光も放たず終るべかりし男を拾ひあげられて、心の宝珠たまの輝きを世に発出いだされし師の美德、困苦に撓たゆまず知己に酬いて遂に仕遂げし十兵衛が頼もしさ、おもしろくまた美はしき奇因縁なり妙因縁なり、天の成せしか人の成せし歟か將又諸天善神の蔭にて操り玉ひし歟、屋をくを造るに巧妙たくみなりし達膩伽尊者たにかそんじやの尊はあれど世尊在世の御時にも如是かく快き事ありしを未だきかねば漢土からにもき

かず、いで落成の式あらば我偈げを作らむ文を作らむ、我歌をよ
み詩を作してな頌せむ讃せむ詠ぜむ記せむと、各々互に語り合ひ
しは慾のみならぬ人間ひとの情の、やさしくもまた殊勝なるに引替
へて、測り難きは天の心、圓道爲右衛門二人が計らひとしてい
と盛んなる落成式しふぎやう執行の日も略定まり、其日は貴賤男女の見物
をゆるし貧者にあま剩れる金を施し、十兵衛其他をねぎ犒らひ賞する一
方には、また伎楽を奏して世に珍しき塔供養あるべき筈に支度
とりぐなりし最中、夜半の鐘の音の曇つて平日つねには似つかず
耳にきたなく聞えしがそもく、漸ぜんくあやしき風吹き出して、
眠れる児童も我知らず夜具踏み脱ぐほど時候生暖かくなるにつ
れ、雨戸のがたつく響き烈しくなりまさり、闇に揉まるゝ松柏
の梢に天魔の号さけびものすごくも、人の心の平和を奪へ平和を奪
へ、浮世の栄華に誇れる奴等の胆を破れや睡りをみだ攪せや、愚物

の胸に血の濤^{なみ}打たせよ、偽物の面の紅き色奪れ、斧持てる者斧を揮へ、矛もてるもの矛を揮へ、汝等が鋭^とき劍は餓えたり汝等劍に食をあたへよ、人の膏^{あぶら}血はよき食なり汝等劍に飽まで喰はせよ、飽まで人の膏膩を餌^かへと、号令きびしく発するや否、猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜叉矛もてる夜叉餓えたる劍もてる夜叉、皆一斉に暴れ出しぬ。

其三十二

長夜の夢を覚まされて江戸四里四方の老若男女、悪風来りと驚き騒ぎ、雨戸の横柄^{よこぎら}子緊^{しつか}乎と挿せ、辛張棒を強く張れと家々ごとに狼狽^{うろた}ゆるを、可憫^{あはれ}とも見ぬ飛天夜叉王、怒号の声音たけぐしく、汝等人を憚るな、汝等人間^{ひと}に憚られよ、人間は我等を

輕んじたり、久しく我等を賤みたり、我等に捧ぐべき筈の定め
の牲にへを忘れたり、這ふ代りとして立つて行く狗、驕奢おごりの塒ねぐら巢作
れる禽とり、尻尾しりをなき猿、物言ふ蛇、露誠実まことなき狐の子、汚穢けがれを知ら
ざる豕みの女め、彼等に長く侮られて遂に何時まで忍び得む、我等
を長く侮らせて彼等を何時まで誇らすべき、忍ぶべきだけ忍び
たり誇らすべきだけ誇らしたり、六十四年は既に過ぎたり、我
等を縛せし機運の鉄鎖、我等を囚へし慈忍にんの岩窟いはやは我が神力に
て扯断ちぎり棄てたり崩潰くづれさしたり、汝等暴れよ今こそ暴れよ、何
十年の恨の毒氣を彼等に返せ一時に返せ、彼等が驕慢ほこりの氣けの臭
さを鉄圀てつさん山外げに攫つかんで捨てよ、彼等の頭を地につかしめよ、無
慈悲の斧の刃味の好きを彼等が胸に試みよ、慘酷の矛、瞋恚しんいの
劍の刃糞と彼等をなしくれよ、彼等が喉のどに氷を与へて苦寒に怖
れ顫わなかしめよ、彼等が胆に針を与へて秘密の痛みに堪ざらしめ

よ、彼等が眼前に彼等が生したる多数の奢侈の子孫を殺して、
玩物の念を嗟歎の灰の河に埋めよ、彼等は蚕児の家を奪ひぬ汝
等彼等の家を奪へや、彼等は蚕児の智慧を笑ひぬ汝等彼等の智
慧を讃せよ、すべて彼等の巧みとおもへる智慧を讃せよ、大と
おもへる意を讃せよ、美しと自らおもへる情を讃せよ、協へり
となす理を讃せよ、剛しとなせる力を讃せよ、すべては我等の
矛の餌なれば、劍の餌なれば斧の餌なれば、讃して後に利器に
餌ひ、よき餌をつくりし彼等を笑へ、鰯らるゝだけ彼等を鰯れ、
急に屠るな鰯り殺せ、活しながらに一枚々皮を剥ぎ取れ、肉
を剥ぎとれ、彼等が心臓を鞠として蹴よ、枳棘をもて脊を鞭て
よ、歎息の呼吸涙の水、動悸の血の音悲鳴の声、其等をすべて
人間より取れ、残忍の外快樂なし、酷烈ならずば汝等疾く死ね、
暴れよ進めよ、無法に住して放逸無慚無理無体に暴れ立て暴れ

立て進め進め、神とも戦へぶつ仏をも擲け、道理を壊やぶつて壊りすて
なば天下は我等がものなるぞと、叱咤する度土石を飛ばして丑
の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも毫ちつとも止まず励ました
つれば、数万すまん けんぞくの眷属勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸をかを
走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃ほこりに黄ばまして日の光をもほと
ほと掩ひ、斧を揮つて数寄者が手入れ怠りなき松を冷笑あざわらひつゝ
ほつきと研るあり、矛を舞はして板屋根に忽ち穴を穿つもあり、
ゆさ／＼と怪力もてさも堅固なる家を動かし橋を揺がすも
のもあり。手ぬるし手ぬるし酷さが足らぬ、我に続けと憤怒の
牙嚙み鳴らしつゝ夜叉王の躍り上つて焦躁いらだてば、虚空に充ち満ち
たる眷属、をたけび鋭くをめき叫んで遮に無に暴威を揮ふほど
に、神前寺内に立てる樹も富家の庭に養はれし樹も、声振り絞
つて泣き悲み、見る／＼大地の髪の毛は恐怖に一とじゆりつ豎立なし、

柳は倒れ竹は割るゝ折しも、黒雲空に流れて檜の実よりも大きな雨ばかりく〜と降り出せば、得たりとますく〜暴るゝ夜叉、垣を引き捨て塀を蹴倒し、門をも破し^{こは}屋根をもめくり軒端の瓦を踏み碎き、唯一^ト揉に屑屋を飛ばし二^タ揉み揉んでは二階を捻ぢ取り、三たび揉んでは某寺^{なにがしでら}を物の見事に潰し^{つぶや}崩し、どうくどつと^{とき}鬨をあぐる其度毎に心を冷し胸を騒がす人々の、彼に氣づかひ此に案ずる笑止の様を見ては喜び、居所さへも無くされて悲むものを見ては喜び、いよく凶に乗り狼藉のあらむ限りを逞しうすれば、八百八町百万の人みな生ける心地せず顔色さらにあらばこそ。

中にも分けて驚きしは圓道爲右衛門、折角僅に出来上りし五重塔は揉まれ揉まれて九輪は動き、頂上の宝珠は空に得読めぬ字を書き、岩をも転ばすべき風の突掛け来り、楯をも貫くべき

雨の打付^{ぶつか}り来る度撓む姿、木の軋る音、復^{もと}る姿、又撓む姿、軋る音、今にも傾覆^{くつがへ}らんず様子に、あれ／＼危し仕様は無きか、傾覆られては大事なり、止むる術も無き事か、雨さへ加はり来りし上周囲に樹木もあらざれば、未曾有の風に基礎^{どだい}狭くて丈のみ高き此塔の堪^{こら}へむことの覚束なし、本堂さへも此程に動けば塔は如何ばかりぞ、風を止むる呪文はきかぬか、かく恐ろしき大暴風雨に見舞に來べき源太は見えぬ歟、まだ新しき出入なりとて重く來では叶はざる十兵衛見えぬか寛怠なり、他^{ひと}さへ斯^{かほど}様氣づかふに己が為^せし塔氣にかけぬか、あれ／＼危し又撓むだは、誰か十兵衛招びに行け、といへども天に瓦飛び板飛び、地上に砂利の舞ふ中を行かむといふものなく、漸く賞美の金に飽かして掃除人の七藏爺を出しやりぬ。

其三十三

耄碌頭巾に首をつゝみて其上に雨を凌がむ準備の竹の皮笠引
被り、鳶子合羽に胴締して手ごろの杖持ち、恐怖ながら烈風強
雨の中を駈け抜けたる七藏爺、やうやく十兵衛が家にいたれば、
これはまた酷い事、屋根半分は既疾に風に奪られて見るさへ氣
の毒な親子三人の有様、隅の方にかたまり合ふて天井より落ち
来る点滴の飛沫を古筵で僅に避け居る始末に、扱ものつそりは
氣に働らきの無い男と呆れ果つゝ、これ棟梁殿、此暴風雨に左
様して居られては濟むまい、瓦が飛ぶ樹が折れる、戸外は全然
戦争のやうな騒ぎの中に、汝の建てられた彼塔は如何あらうと
思はるゝ、丈は高し周圍に物は無し基礎は狭し、何の方角から
吹く風をも正面に受けて揺れるは揺れるは、旗竿ほどに撓むで

はきち／＼と材きの軋る音の物凄さ、今にも倒れるか壊れるかと、
圓道様も爲右衛門様も胆を冷したり縮ましたりして気が氣では
無く心配して居らるゝに、一体ならば迎ひなど受けずとも此天
変を知らず顔では済まぬ汝が出て来ぬとは余あんまりな大勇、汝の
御蔭で險難けんなんな使を吩咐かり、忌々しい此瘤を見て呉れ、笠は吹
き攫はれる全濡ずぶぬれにはなる、おまけに木片が飛んで来て額に打付
りくさつたぞ、いゝ面の皮とは我がこと、さあ／＼一所に來て
呉れ來て呉れ、爲右衛門様圓道様が連れて来いとおいひつけの御命令だは、
ゑゝ吃驚した、雨戸が飛んで行て仕舞ふたのか、これだもの塔が
堪るものか、話する間にも既倒れたか折れたか知れぬ、愚図
ゝせずと身支度せい、疾く／＼と急り立つれば、傍から女房
も心配氣に、出て行かるゝなら途中が危険あぶない、腐つても彼火事
頭巾、あれを出しましよ冠つてお出なされ、何が飛んで来るか

知れたものではなし、外見みえよりは身が大切、何程いくら檻褌でも仕方ない刺子さしこ絆纏ばんてんも上に被ておいでなされ、と戸棚がたゞ明けにかゝるを、十兵衛不興氣の眼でぢつと見ながら、あゝ構ふてくれずともよい、出ては行かぬは、風が吹いたとて騒ぐには及ばぬ、七藏殿御苦勞でござりましたが塔は大丈夫倒れませぬ、何の此程の暴風雨で倒れたり折れたりするやうな脆いものではござりませぬば、十兵衛が出掛けてまゐるにも及びませぬ、圓道様にも爲右衛門様にも左様云ふて下され、大丈夫、大丈夫でござります、と泰然おちつきはらつて身動きもせず答ふれば、七藏少し膨れ面して、まあ兎も角も我と一緒に来て呉れ、来て見るがよい、彼の塔のゆき／＼きち／＼と動くさまを、此処に居て目に見ねばこそ威張つて居らるれ、御開帳の幟のぼりのやうに頭を振つて居るさまを見られたら何程なんば十兵衛殿寛濶おうやうな氣性でも、お氣の毒なが

ら魂魄たましひがふはり／＼とならるゝであらう、蔭で強いのが役にはたゝぬ、さあ／＼一所に來たり來たり、それまた吹くは、嗚呼恐ろしい、中々止みさうにも無い風の景色、圓道様も爲右衛門様も定めし肝を煎つて居らるゝぢやろ、さつさと頭巾なり絆纏なり冠るとも被るともして出掛けさつしやれ、と遣り返す。大丈夫でござりまする、御安心なさつて御歸り、と突撥る。其の安心が左様手易くは出来ぬわい、と五月蠅云ふ。大丈夫でござりまする、と同じことをいふ。末には七藏焦れこむで、何でも彼でも來いといふたら來い、我の言葉とおもふたら違ふぞ圓道様爲右衛門様の御命令ぢや、と語氣あらくなれば十兵衛も少し勃然むっとして、我は圓道様爲右衛門様から五重塔建ていとは命令かりませぬ、御上人様は定めし風が吹いたからとて十兵衛よべとは仰やりますまい、其様な情無い事を云ふては下さりますま

い、若も御上人様までが塔危いぞ十兵衛呼べと云はるゝやうに
ならば、十兵衛一期の大事、死ぬか生きるかの瀬門せとに乗かゝる
時、天命を覚悟して駈けつけませうなれど、御上人様が一言半
句十兵衛の細工を御疑ひなさらぬ以上は何心配の事も無し、余
の人たちが何を云はれうと、紙を材きにして仕事もせず魔術てづまも手
拔もして居ぬ十兵衛、天氣のよい日と同じことに雨の降る日も
風の夜も楽々として居りまする、暴風雨が怖いものでも無けれ
ば地震が怖うもござりませぬと圓道様にいふて下され、と愛想
なく云ひ切るにぞ、七藏仕方なく風雨の中を駈け抜けて感応寺
に帰りつき圓道爲右衛門に此よし云へば、さても其場に臨むで
の智慧の無い奴め、何故其時に上人様が十兵衛来いとの仰せぢ
やとは云はぬ、あれ／＼彼揺るゝ態を見よ、汝きみまでがのつそり
に同化かふれて寛怠過ぎた了見ぢや、是非は無い、も一度行つて上人

様の御言葉ぢやと欺誑たばかり、文句いはせず連れて来い、と圓道に烈しく叱られ、忌々しさに独語つぶやきつゝ七藏ふたゝび寺門を出でぬ。

其三十四

さあ十兵衛、今度は是非に來よ四の五のは云はせぬ、上人様の御召ぢやぞ、と七藏爺いきりきつて門口から我鳴れば、十兵衛聞くより身を起して、なにあの、上人様の御召なさるとか、七藏殿それは真実まことでござりまするか、嗚呼なさけ無い、何程風の強ければとて頼みきつたる上人様までが、此十兵衛の一心かけて建てたものを脆こはくも破壊るゝ歟のやうに思し召されたか口惜しい、世界に我を慈悲の眼で見下さるゝ唯一つの神とも仏と

もおもふて居た上人様にも、真底からは我が手腕^{うで}たしかと思はれざりし歟、つくぐ頼母^{ならび}しげ無き世間、もう十兵衛の生き甲斐無し、たまぐ当時^{あた}に双なき尊き智識に知られしを、是れ一生の面目とおもふて空に悦びしも真に果敢無き少時^{しばし}の夢、嵐の風のそよと吹けば丹誠凝らせし彼塔も倒れやせむと疑はるゝとは、ゑゝ腹の立つ、泣きたいやうな、それほど我は腑^{やつ}の無い奴か、恥をも知らぬ奴^{やつこ}と見ゆる歟、自己^{おのれ}が為たる仕事^{はぢ}が恥辱^{はぢ}を受けてものめく、面押拭ふて自己は生きて居るやうな男と我は見らるゝ歟、仮令ば彼塔倒れた時生きて居やうか生きたからう歟、ゑゝ口惜い、腹の立つ、お浪、それほど我が鄙^{さも}しからうか、嗚呼ゝ生命^{もう}も既いらぬ、我が身体にも愛想の尽きた、此世の中から見放された十兵衛は生きて居るだけ恥辱^{はぢ}をかく苦惱^{くるしみ}を受け、ゑゝいつその事塔も倒れよ暴風雨も此上烈しくなれ、少し

なりとも彼塔に損じの出来て呉れよかし、空吹く風も地打つ雨
も人間^{ひと}ほど我には情無^{つねな}からねば、塔破^{こは}壊されても倒されても悦
びこそせめ恨はせじ、板一枚の吹きめくられ釘一本の抜かるゝ
とも、味気無き世に未練はもたねば物の見事に死んで退けて、
十兵衛といふ愚魯^{ばかもの}漢は自己が業の粗漏^{てぬかり}より恥辱を受けても、生
命惜しさに生存^{いきながら}へて居るやうな鄙劣^{けち}な奴では無かりしか、如是^{かゝる}
心を有つて居しかと責めては後にて吊^{とむら}はれむ、一度はどうせ捨
つる身の捨処よし捨時よし、仏寺を汚すは恐れあれど我が建て
しもの壊れしならば其場^{てつぺん}を一步立去り得べきや、諸仏菩薩も御
許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てむ、投ぐる
五尺の皮囊^{かはぶくろ}は潰れて醜^{みにく}かるべきも、きたなきものを盛つては居
らず、あはれ男児^{をとこ}の醇粹^{いつぽんぎ}、清浄の血を流さむなれば愍然^{みびん}ともこ
そ照覧あれと、おもひし事やら思はざりしや十兵衛自身も半分

知らで、夢路を何時の間にか辿りし、七藏にさへ何処でか分れて、此所は、おゝ、それ、その塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押明けて今しもぬつと十兵衛半身あらはせば、礫を投ぐるが如き暴雨の眼も明けさせず面を打ち、一ツ残りし耳までも扯断らむばかりに猛風の呼吸さへ為せず吹きかくるに、思はず一足退きしが屈せず奮つて立出でつ、欄を握むで屹と睥めば天は五月の闇より黒く、たゞ囂々たる風の音のみ宇宙に充て物騒がしく、さしも堅固の塔なれど虚空に高く聳えたれば、どうくどつと風の来る度ゆらめき動きて、荒浪の上に揉まるゝ棚無し小舟のあはや傾覆らむ風情、流石覚悟を極めたりしも又今更におもはれて、一期の大事死生の岐路と八万四千の身の毛豎たせ牙咬定めて眼を睜り、いざ其時とは手にして来し六分鑿の柄忘るゝばかり引握むでぞ、天命を静かに待

つとも知るや知らずや、風雨いとはず塔の周囲めぐりを幾度となく徘徊する、怪しの男一人ありけり。

其三十五

去る日の暴風雨は我等生れてから以来このかた第一の騒なりしと、常は何事に逢ふても二十年前三十年前にありし例をひき出して古きを大袈裟に、新しきを訳も無く云ひ消すかたぎ氣質としよりの老人さへ、真底我折つて噂仕合へば、まして天変地異をおもしろづくで談話はなしの種子にするやうの剽軽な若い人は分別も無く、後腹の疾まぬを幸ひ、何処ひとの火の見が壊れたり彼処の二階が吹き飛ばされたりと、他の憂ひとひ災難を我が茶受とし、醜態ぎまを見よ馬鹿慾から芝居の金主して何某め痛い目に逢ふたるなるべし、さても笑止彼の

小屋の潰れ方はよ、又日頃より小面憎かりし横町の生花の宗匠が二階、御神楽だけの事はありしも気味^{きび}よし、それよりは江戸で一二といはるゝ大寺の脆く倒れたも仔細こそあれ、実は檀徒から多分の寄附金集めながら役僧の私曲^{わたくし}、受負師の手品、そこにはその有りし由、察するに本堂の彼の太い柱も桶でがな有つたらうなどと様々の沙汰に及びけるが、いづれも感応寺生雲塔の釘一本ゆるまず板一枚剥がれざりしには舌を巻きて讃歎し、いや彼塔^{あれ}を作つた十兵衛といふは何とえらいものではござらぬ歟、彼塔倒れたら生きては居ぬ覚悟であつたさうな、すでの事に鑿^{ふく}啣^くんで十六間真逆しまに飛ぶところ、欄干^{てすり}を斯う踏み、風雨を睨んで彼程の大揉の中に泰然^{ちやっ}と構へて居たといふが、其一念でも破壊るまい、風の神も大方血眼で睨まれては遠慮が出たであらう歟、甚五郎このかたの名人ぢや真の棟梁ぢや、浅草

のも芝のもそれぐ損じのあつたに一寸一分歪みもせず退りも
せぬとは能う造つた事の。いやそれについて話しのある、其十
兵衛といふ男の親分がまた滅法えらいもので、若しも些なり破
壊れでもしたら同職なかまの恥辱知合の面汚し、汝うぬはそれでも生きて
居られうかと、到底とても再度鉄槌も手斧も握る事の出来ぬほど引叱
つて、武士で云はば詰腹同様の目に逢はせうと、ぐるぐると
大雨を浴びながら塔の周囲を巡つて居たさうな。いやぐ、そ
れは間違ひ、親分では無い商売上敵がたきぢやさうな、と我れ知り顔
に語り伝へぬ。

暴風雨のために準備したく狂ひし落成式もいよく済みし日、上人
わざぐ源太を召よび玉ひて十兵衛と共に塔に上られ、心あつて
雛僧こぞうに持たせられし御筆に墨汁すみしたゝか含ませ、我此塔に銘じ
て得させむ、十兵衛も見よ源太も見よと宣のたまひつゝ、江都かうとの住人

十兵衛之を造り川越源太郎之を成す、年月日とぞ筆太に記し了
られ、満面ひれふに笑を湛をがへて振り顧り玉へば、兩人ともに言葉なく
たゞ平伏ひれふして拝謝をがみけるが、それより宝塔とこしな長へに天に聳えて、
西より瞻みれば飛檐ひえん或時素月を吐き、東より望めば勾欄夕に紅日
を呑んで、百有余年の今になるまで、譚はなしは活きて遺りける。

(明治二十四年十一月―二十五年三月・四月「国会」)

後註

- 一 ルビの「こばうず」は底本では「こばうす」
- 二 ルビの「なんだ」はママ
- 三 「十兵衛」は底本では「十衛兵」

底本：「日本現代文學全集 6 幸田露伴集」講談社
1963（昭和 38）年 1 月 19 日初版第 1 刷発行
1980（昭和 55）年 5 月 26 日増補改訂版第 1 刷

初出：「国会新聞」

1891（明治 24）年 11 月～1892（明治 25）年 4 月

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字、旧仮名にあらためました。

入力：kompass

校正：浅原庸子

2004 年 11 月 3 日作成

2009 年 7 月 29 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。